

鬼津横穴墓群Ⅱ

遠賀町文化財調査報告書

第20集

鬼津横穴墓群Ⅱ

遠賀町文化財調査報告書

第20集

2013年

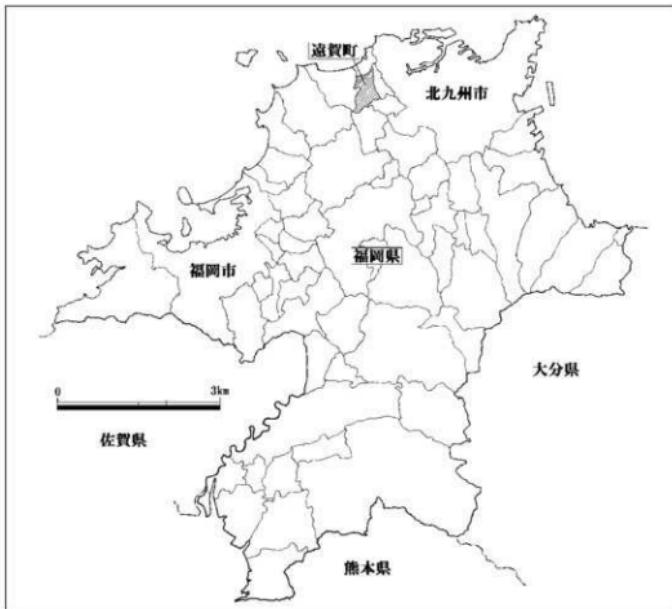
遠賀町教育委員会

遠賀町教育委員会

鬼津横穴墓群Ⅱ

遠賀町文化財調査報告書

第20集



2013年

遠賀町教育委員会

序 文

鬼津横穴墓群は、遠賀町の北部に位置する通称芦屋丘陵と呼ばれる砂質の低丘陵に露出する砂岩と頁岩が互層になった岩盤に掘り込まれた古墳時代のお墓です。古くは昭和42年に当時の遠賀町の文化財保護委員が町内の埋蔵文化財包蔵地の分布調査を実施した際に、舌状丘陵の南側斜面に10基の横穴墓群が所在することが報告されております。やや時を経て、平成15年にはその東約40mの丘陵東側斜面で、土地所有者が畑の開墾に先だって行った竹林の造成時に横穴墓の玄室天井部が開口しました。当該地付近にも横穴墓が所在することが予測され、付近一帯の一部を発掘調査した結果、新たに12基の横穴墓が発見されています。この時の調査によって、旧来報告されていた鬼津横穴墓群の包蔵地の範囲が丘陵の東側に拡大するとともに、主に横穴墓の墓道部に限った調査ではありましたが、各墓室の状況や構成単位などの一端を窺うる資料となりました。

この報告書は、昭和42年に発見されていながら位置関係等の基礎的な情報が乏しかった1～10号横穴墓の所在の確認および、丘陵上に築かれた横穴墓群の空間的な広がり等を把握することを目的に実施した遺跡詳細分布調査の記録と、墓室が掘り込まれた砂岩の岩盤の風化で自然崩壊する危険性のあった1・13号横穴墓の記録保存目的とした自然崩壊本調査の記録をまとめたものであります。両調査とも平成23年度に国・県からの補助を受けて遠賀町教育委員会が調査を行い、平成24年度に調査記録の整理と報告書の作成を行いました。調査にあたっては、今回実施した調査が開発事業等に先立つ記録保存目的とした調査ではなかつたため、埋蔵文化財の保護上、必要最低限の破壊に留めることに留意し、主にトレンチによる調査を行っております。そのため、今回の調査報告書で鬼津横穴墓群の全容を窺い知ることは出来ませんが、今後の基礎資料として活用し得ることは間違ひありません。

この報告書の調査成果が、遠賀川下流域における古墳時代の歴史の構築に寄与する資料となるとともに、考古学を始めとする諸分野の学術研究の一助となれば幸いに存じます。また、調査成果の活用により、埋蔵文化財に対する保護意識の掲揚や普及・啓発へつながることを祈念し、結びの言葉とさせていただきます。

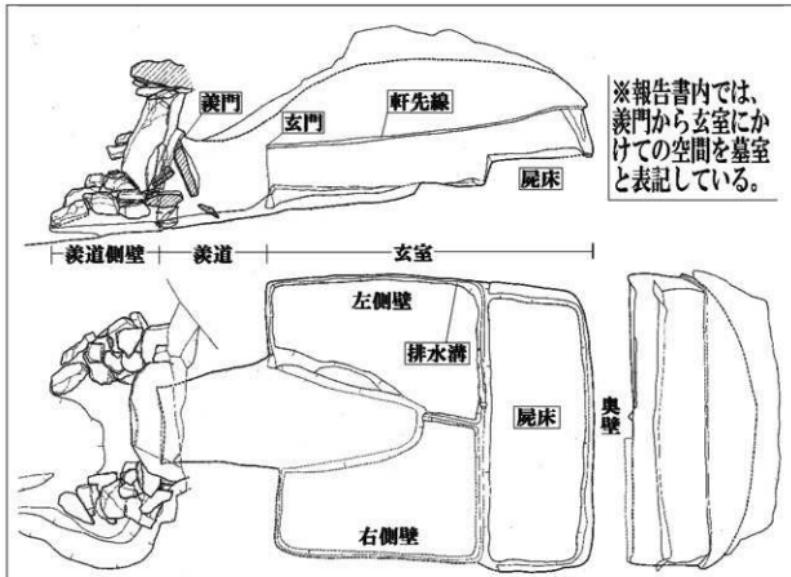
最後になりましたが、発掘調査および本報告書作成にあたってご協力・ご助言をいただきました関係各位の方々に心よりお礼を申し上げます。

平成25年3月31日

遠賀町教育委員会
教育長 中尾 治実

例　言

1. 本書は、平成 23 年度に遠賀町教育委員会が国・県より補助を受けて実施した自然崩壊本調査および遺跡詳細本調査の調査記録であり、平成 24 年度に調査記録の整理・報告書作成を行った。
2. 調査中の遺構の実測は、調査担当の平野隆之と武田光正が行い、地形測量図の作成時には大坪剛（水巻町教育委員会）氏の協力を得た。
3. 出土遺物の実測は平野が行った。
4. 遺構と出土遺物の写真撮影は主に武田が行った。
5. 報告書に掲載している測量図や遺構、出土遺物の製図は、藤井律花氏が行った。
6. 本書で使用する図面の方位は、全て国土調査法第Ⅱ座標系での座標北を示し、座標値はいずれも世界測地系に変換している。
7. 報告書文中で述べる横穴墓の各部名称については、下図のとおりとする。
8. 本調査で出土した遺物や作成した図面・写真などは、遠賀町教育委員会で保管している。
9. 本書の執筆及び編集は平野が行った。



横穴墓部位名称

本文目次

(頁)

| | | |
|------|---------------|----|
| I. | はじめに | 1 |
| 1. | 調査にいたる経緯 | 1 |
| 2. | 調査の経過 | 1 |
| 3. | 調査組織 | 2 |
| II. | 位置と環境 | 3 |
| III. | 調査の内容 | 5 |
| 1. | 概要 | 5 |
| 2. | 遺構と遺物の概要 | 6 |
| 3. | 各横穴墓の調査成果について | 7 |
| IV. | おわりに | 40 |

挿図目次

(頁)

| | | |
|------|------------------------------------|------|
| 第1図 | 鬼津横穴墓群周辺の埋蔵文化財包蔵地 | 3 |
| 第2図 | 既存の調査区と今回の調査範囲 | 5 |
| 第3図 | 地形図および鬼津横穴墓群遺構配置図 (S = 1/300) | 折り込み |
| 第4図 | 1号横穴墓実測図 (S = 1/30) | 7 |
| 第5図 | 1号横穴墓出土遺物① (S = 1/3) | 8 |
| 第6図 | 1号横穴墓出土遺物② (S = 1/4) | 9 |
| 第7図 | 4号横穴墓実測図 (S = 1/60) | 10 |
| 第8図 | 5号横穴墓実測図 (S = 1/60) | 10 |
| 第9図 | 6・7号横穴墓実測図 (S = 1/60) | 11 |
| 第10図 | 6号横穴墓付近表探遺物 (S = 1/3, 1/4) | 12 |
| 第11図 | 8・30号横穴墓実測図 (S = 1/60) | 13 |
| 第12図 | 8・30号、13、22号横穴墓出土遺物 (S = 1/3, 1/4) | 14 |

| | | |
|--------|---------------------------------------------------|------|
| 第 13 図 | 9号横穴墓実測図 (S = 1/60) | 15 |
| 第 14 図 | 10 - 1号墓実測図 (S = 1/60) | 15 |
| 第 15 図 | 10 - 2号墓実測図 (S = 1/60) | 15 |
| 第 16 図 | 13号横穴墓実測図 (S = 1/40) | 16 |
| 第 17 図 | 13号横穴墓主墓道土層図、13 - 2号墓実測図 (S = 1/60) | 17 |
| 第 18 図 | 13 - 1号墓実測図 (S = 1/30) | 折り込み |
| 第 19 図 | 13号横穴墓出土遺物② (S = 1/3) | 20 |
| 第 20 図 | 13号横穴墓出土遺物③ (S = 1/3) | 21 |
| 第 21 図 | 13号横穴墓出土遺物④、19、21号横穴墓出土遺物 (S = 1/3、1/4、1/6) | 22 |
| 第 22 図 | 13号横穴墓出土遺物⑤ (S = 1/4) | 24 |
| 第 23 図 | 13号横穴墓出土遺物⑥ (S = 1/2) | 25 |
| 第 24 図 | 19号横穴墓実測図 (S = 1/60) | 26 |
| 第 25 図 | 19 ~ 21号、24・25号横穴墓出土遺物 (S = 1/3、1/4) | 27 |
| 第 26 図 | 20号横穴墓実測図 (S = 1/60) | 28 |
| 第 27 図 | 21号横穴墓実測図 (S = 1/60) | 28 |
| 第 28 図 | 21号横穴墓出土遺物② (S = 1/4) | 30 |
| 第 29 図 | 22号横穴墓実測図 (S = 1/60) | 31 |
| 第 30 図 | 23号横穴墓実測図 (S = 1/60) | 31 |
| 第 31 図 | 24号横穴墓実測図 (S = 1/60) | 32 |
| 第 32 図 | 25号横穴墓実測図 (S = 1/60) | 33 |
| 第 33 図 | 25、28、29、31号横穴墓出土遺物 (S = 1/3、1/4、1/6) | 34 |
| 第 34 図 | 26号横穴墓実測図 (S = 1/60) | 35 |
| 第 35 図 | 27号横穴墓実測図 (S = 1/60) | 35 |
| 第 36 図 | 28号横穴墓実測図 (S = 1/60) | 36 |
| 第 37 図 | 29号横穴墓実測図 (S = 1/60) | 36 |
| 第 38 図 | 31号横穴墓実測図 (S = 1/60) | 37 |
| 第 39 図 | 表採遺物および過去調査時出土遺物 (S = 1/3) | 38 |
| 第 40 図 | 過去調査時出土遺物② (S = 1/6) | 39 |
| 第 41 図 | 各横穴墓の玄室規模と立面形の相関関係 | 40 |

表 目 次

(頁)

| | | |
|-------|----------------|----|
| 第 1 表 | 出土土器観察表① | 42 |
| 第 2 表 | 出土土器観察表② | 43 |
| 第 3 表 | 出土土器観察表③ | 44 |
| 第 4 表 | 出土土器観察表④ | 45 |

図版目次

- 図版 1 上：鬼津横穴墓群と鳥見山古墳・横穴墓群（空中写真）
下：調査前の1・23号横穴墓（東から）
- 図版 2 上：1号横穴墓玄室内（東から） 下：2号横穴墓（北東から）
- 図版 3 上：調査前の4号横穴墓（東から） 下左：4-1号横穴墓検出状況（東から）
下右：4-2号横穴墓検出状況（東から）
- 図版 4 上左：7号横穴墓羨道入口（南から） 上右：5号横穴墓（南から）
下：6・7号横穴墓（南から）
- 図版 5 上左：8-2号墓墓室内（西から） 上左：8号墓墓道出土土器（西から）
下左：8号墓調査前（西から） 下右：8・30号墓検出状況（北西から）
- 図版 6 上左：10号横穴墓検出状況（南から） 上右：9号横穴墓（南から）
下：平成15年度調査時の丘陵東側横穴墓群（右端が13号横穴墓、南東から）
- 図版 7 上：13号横穴墓主墓道東西壁土層（南東から）
下：13号横穴墓主墓道南北土層（西から）
- 図版 8 上：13-2号墓検出状況（写真左側は15-2号墓、東から）
下：13-1号墓羨門の閉塞状況（南西から）
- 図版 9 上：13-1号墓玄室内土器出土状況（北から）
中：同上玄室内屍床と鉄刀の出土状況（南から）
下：19号墓検出状況（南東から）
- 図版 10 上左：21号墓検出状況（南東から） 上右：20号墓検出状況（南東から）
下左：22号墓検出状況（南東から） 下右：調査前の23号墓（南東から）
- 図版 11 上：23号墓玄室内（南東から） 下：同上羨道部に残る鑿状工具痕（南西から）
- 図版 12 上左：27号墓検出状況（南から） 上右：25号墓検出状況（西から）
下左：29号墓（調査前、北西から） 下右：28号墓墓道西側（東から）
- 図版 13 上左：29号墓検出状況（南西から） 上右：29-1号墓閉塞石（南西から）
下左：29-1号墓墓室内（南西から） 下右：31-2号墓（南東から）
- 図版 14 上左：13号墓埋め戻し状況① 上右：1・23号墓埋め戻し状況
下左：13号墓埋め戻し後（南東から） 下右：13号墓埋め戻し状況②
- 図版 15 出土遺物①
- 図版 16 出土遺物②

I. はじめに

1. 調査にいたる経緯

鬼津横穴墓群は遠賀町大字鬼津 2923-1、2934 に所在する。当横穴墓群の発見の端緒は、昭和 42 年に当時の遠賀町の文化財保護委員が行った町内遺跡の分布調査で、舌状丘陵の南側斜面にあたる鬼津 2934 に 10 基の横穴墓が所在することが確認された。平成 15 年度には、当該地の東約 40m の丘陵東側斜面にあたる鬼津 2934-1 で、土地所有者の井口弘光氏が畑の開墾に先立ち竹林を造成していたところ、横穴墓が一部開口したとの連絡が町教育委員会に寄せられた。丘陵南側斜面に所在する 10 基の横穴墓との位置関係や付近に露出する固結堆積岩の状況を考えると、当該地にも横穴墓が分布することが予測されたため、付近一帯を一部発掘調査したところ、8 基の横穴墓がみつかり、低所にも更に 4 基が築かれていることが判明した。この時の調査は主に横穴墓の墓道部に限った調査であり、造墓の時期や各横穴墓の構成単位等の詳細を知り得ることは出来なかつたが、その一端を窺うる資料となつた。

鬼津横穴墓群は、固結堆積岩が露出する舌状丘陵の南側から東側斜面にかけて築かれ、総数は 20 基ほどに及ぶことが明らかとなったが、南側斜面に築かれた 10 基については過去の調査時の簡易なメモが残るのみで、位置関係を含む基礎的な資料が乏しい状況であった。幸い 1 号横穴墓については民家に隣接した位置にあり、比較的現況を確認しやすい状態であった。平成 13 年頃になるが、1 号横穴墓が築かれた岩盤が風化や降雨の影響により、開口部から自然崩壊しつつある旨が近隣住民より伝えられた。当時の対処としては、墓室の崩壊が進行しないように開口部を塞ぐ等の崩落防止措置を施したが、墓室内の調査は諸事情により行えなかつた。また、平成 15 年度の調査の契機となった横穴墓は 13 号横穴墓とされ、石積みの渓道側壁の一部が確認されたが、調査期間の制約もあり、墓室内の調査は行えていなかつた。調査終了後は開口部を塞いで盛土を行つたが、後の降雨の影響で充填部が沈下し続いている旨が井口氏より寄せられていた。遠賀町教育委員会としては、自然崩壊で未調査の横穴墓が消滅する危険性を考慮して、平成 23 年度に国・県から補助を受けて、この 2 基の横穴墓の記録を残すための本調査を実施することとした。同年度には、同じく国・県からの補助を受けて町内遺跡の分布調査を予定していたこともあり、遺跡の情報に乏しかつた丘陵南側斜面の状況確認と、横穴墓群の広がりを把握するための分布調査を行つた。

2. 調査の経過

平成 23 年度に鬼津 1・13 号横穴墓の自然崩壊本調査と町内遺跡分布調査を予定していたため、調査計画の当初より、両調査を効果的に組み合わせて鬼津横穴墓群の基礎資料を充実させることを目的としていた。そのため、調査時期については、地形観察に適した冬季に行うこととし、遺跡一帯の地形測量図を作成するために横穴墓の分布調査から始めた。丘陵南側に所在する 10 基の横穴墓の位置関係や丘陵上での横穴墓の分布状況を把握した後、1・13 号横穴墓の本調査を実施した。以下、調査日誌より特記事項を記す。

12月5～16日 横穴墓の分布調査開始。調査区内の竹林の伐採を行う。丘陵南側斜面を中心に複数の横穴墓が開口しており、基數が増加することが予測された。

12月12～16日 過去の調査記録をもとに1～10号墓の同定を行うとともに、丘陵南～東斜面の裾部にトレーンチを設定、掘り下げを行う。新たに9基の横穴墓を発見。

12月16～22日 各横穴墓の平面図作成

12月25日 測量基準点の設置（業者委託）

12月27日 8・2号墓の墓室前を一部掘り下げたところ、供獻土器群と渾門を検出。

1月5日 自然崩壊本調査開始。13号墓周囲の埋め戻し土を掘り下げるとともに地形測量図の作成を始める。

1月10～18日 分布調査で設定した各トレーンチは、国化・埋め戻しを終えた所から伐採した竹を利用してしがらを設置。既調査時の検出面まで掘り下げた13号墓は、主墓道の掘り下げ・国化に移る。

1月20日～ 13-1号墓玄室内の調査開始

1月23日～ 1号墓の調査開始。直上に築かれた23号

墓を本調査の対象に加える。13-1号墓の渾門の閉塞状況を確認。玄室内の屍床前に鉄刀、玄門側に土器が副葬された状態を検出。

1月24日 1・23号墓の玄室内を完掘後、國化作業に移る。

1月31日 1号墓の國化終了。周囲を地形測量。丘陵東側斜面の地形測量開始。

2月2日 13-1号墓の玄室内を完掘。

2月6日 23号墓の國化終了後、埋め戻し

2月7～23日 13-1号墓の玄室内から渾門にかけての國化作業に移る。國化を終えたところから埋め戻しを行いう。

2月24日 13号墓調査区の埋め戻し終了。

2月27日 調査区全域の埋め戻し後、余った竹を処分場へ搬出。自然崩壊本調査終了。

3月15日 調査記録を整理した結果、21号墓が検出されていなかったため、追加でトレーンチを設定。國化・測量図への追加、埋め戻しを終えて分布調査を終了する。

調査期間中には、大坪剛氏（水巻町教育委員会）に測量支援をいただきました。記して、感謝申し上げます。

3. 調査組織

平成23年度から24年度までの本事業の組織は次の通りである。

| 遠賀町教育委員会 | 平成23年度 | 平成24年度 |
|-----------|--------------------------|------------|
| 総括 教育長 | 大村 信義（～H23.12） | 中尾 治美 |
| | 中尾 治美（～H24.1～） | |
| 生涯学習課長 | 松井 京子 | 松井 京子 |
| 庶務 社会教育係長 | 鎌田 清一 | 小西 政明 |
| 社会教育係 | 平野 隆之 | 平野 隆之 |
| 調査・報告書担当 | 平野 隆之 | 平野 隆之 |
| | 武田 光正（再任用） | 武田 光正（再任用） |
| 現場作業員 | 安藤 けい子 井口 弘光 岩崎 靖夫 高野 清美 | |
| | 高野 俊子 田中 典子 寺本 逸男 村井 里美 | |
| 整理作業員 | 久保田 節子 藤井 律花 村井 里美 | |

なお、調査にあたっては、土地所有者である井口保男氏、井口弘光氏を中心とする方々にご協力をいただいたことを記し、感謝の言葉に代えさせていただきます。

II. 位置と環境

鬼津横穴墓群は、遠賀町の北部を東西に取り巻く芦屋丘陵と呼ばれる砂質低丘陵上に所在する。この丘陵の東部には、古第三紀層に形成された砂岩と頁岩の互層からなる固結堆積岩の露出地帯があり、横穴墓群はその岩盤を穿って築かれている。

遠賀町の町域の大半は、遠賀川の沖積作用で形成された標高3mに満たない平地であり、繩文時代には古遠賀湯と呼ばれる内海が形成されていたため、人々は丘陵上に生活の基盤を求めた状況が遺跡の分布状況から垣間見ることができる。¹¹⁾前回の調査報告書で周辺の遺跡について一部触れられているため、芦屋丘陵上の遺跡を中心に重複する箇所を除き、古代までの歴史的背景を述べていく。ただし、旧石器から繩文時代の遺跡については、今回の報文では割愛する。

弥生時代には、町域の大半を占める古遠賀湯は、標高3~5mの低丘陵裾部や微高地上に所在する貝塚等の分布から、若干縮小したと考えられるが、依然として丘陵上を中心に入々の生活が営まれていた。芦屋丘陵の西に位置する尾崎・天神遺跡では、¹²⁾弥生時代前期末から中期初頭の円形住居を始め、同時期を中心とする断面袋状、方形、逆台形を呈す貯蔵穴が多数確認されている。隣接する金丸遺跡では、¹³⁾同時期頃の貯蔵穴が僅かに確認された他、磨製石戈や細形銅劍が副葬された土壙墓が検出された。両遺跡の400m南にある慶ノ浦遺跡は標高10m前後の微高地上にあり、深く進入した古遠賀湯の対岸となる場所に位置している。同遺跡では弥生時代前期後半から末を主体とする20基以上の貯蔵穴が確認され、弥生時代前期末から中期中頃にかけて30基以上の土壙墓を中心とする墓が築かれ、勾玉や管玉、鉄劍形銅劍等が副葬されている。¹⁴⁾3遺跡とも農地に所在していたため、後世の耕作等で遺跡の一部が消滅しており、様相については一部不詳な点が残る。弥生時代中期以降の遺跡は調査例が少ないため不詳であるが、町南部に所在する花園遺跡では、遺物包含層に弥生時代前期末から中期末までの土器が多量に出土したことから、当遺跡の高所に相当数の住居跡が存在すると推測されている。



1. 鬼津横穴墓群
2. 尾崎・天神遺跡
3. 金丸遺跡
4. 慶ノ浦遺跡
5. 城ノ越貝塚
6. 花園遺跡
7. 島津・丸山古墳群
8. 塚の元古墳群
9. 豊前坊古墳群
10. 鳥見山古墳・横穴墓群
11. 浜口（月軒）廃寺
12. 高山池窯跡
13. 墓ノ尾遺跡群
14. 尾崎・友田遺跡

第1図 鬼津横穴墓群周辺の埋蔵文化財包蔵地 (S=1/60,000)

古墳時代になると、芦屋丘陵から東の大字島津で、古遠賀潟内の独立低丘陵上に遠賀川下流域で最古の前方後円墳島津・丸山古墳が築かれる。この南に広がる低台地上に所在する塚の元古墳群も含めると、4世紀前半から5世紀後半にかけて連続と造墓が行われた状況が窺える。町南部の大字上別府では、標高70mの丘陵上に2基の前方後円墳を含む豊前坊古墳群が所在し、島津・丸山古墳に後続する4世紀後半から5世紀初頭に造墓が行われている。このほか、町内各地で低丘陵上を中心に古墳が築かれるが、それらに対応する集落は未調査な場所が多く、不詳な点が残る。尾崎・天神遺跡や金丸遺跡では、古墳時代後期を中心に5世紀から7世紀代の住居跡が数多く発見され、小型鍛冶炉や作業工房跡などの遺構、輪羽口や多量の鉄滓の出土から、製鉄を生業とする集団の集落が営まれていたことが確認された。5世紀後半頃に比定される尾崎・天神遺跡1号墳で金銅製三輪玉が出土しており、被葬者と集落との関係性についても注目できる。

奈良～平安期には、芦屋丘陵を中心として、西海道の駅家・島門駅や、天平12年（740年）に大宰少弐藤原広嗣が挙兵時に拠点とした遠賀郡衙の関連施設が見つかっている。浜口廃寺は芦屋丘陵から長く伸展した低丘陵上に位置し、明確な遺構は発見されていないものの、各種の瓦の多量の出土や、柱座のある礎石が確認されており、古くからこの遺跡周辺を島門駅に比定する説がある。尾崎・天神遺跡では、丘陵の高所で7世紀中頃～8世紀前半を盛期とする掘立柱建物や池状造構が確認され、建物の規模や配置等から郷・里長などの豪族居館と推定される。また、隣接する金丸遺跡では、官衙の正倉と考えられる大型建物が検出されていることからも、近辺に遠賀郡衙が所在する可能性が高い。また、両遺跡の近隣には、浜口廃寺と同紋の軒丸瓦が採集されている高山池窯跡や、8世紀前半頃の鬼面文鬼瓦が出土した幕ノ尾遺跡群、この2遺跡に後続する9世紀代の瓦窯が確認された尾崎・友田遺跡などがあり、官衙施設に瓦を供給する窯跡が付近に所在していることも特筆される。

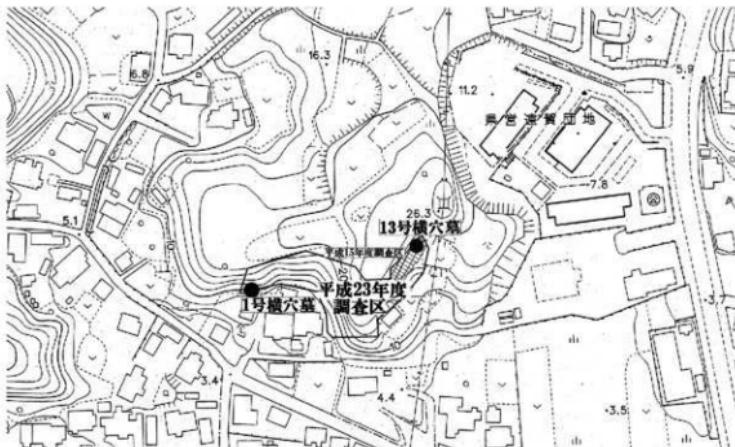
- 註1. 遠賀町教育委員会『鬼津横穴墓群』2006 遠賀町文化財調査報告書 第17集
- 註2. 遠賀町教育委員会『尾崎・天神遺跡Ⅰ』1991 遠賀町文化財調査報告書 第2集
遠賀町教育委員会『尾崎・天神遺跡Ⅱ』1992 遠賀町文化財調査報告書 第4集
遠賀町教育委員会『尾崎・天神遺跡Ⅲ』1995 遠賀町文化財調査報告書 第7集
遠賀町教育委員会『尾崎・天神遺跡Ⅳ』1999 遠賀町文化財調査報告書 第13集
遠賀町教育委員会『尾崎・天神遺跡V・金丸遺跡Ⅱ』遠賀町文化財調査報告書 第18集
- 註3. 遠賀町教育委員会『金丸遺跡』1999 遠賀町文化財調査報告書 第12集 と前出の第18集
- 註4. 遠賀町教育委員会『先ノ野遺跡・慶ノ浦遺跡』2001 遠賀町文化財調査報告書 第14集
- 註5. 遠賀町教育委員会『花園遺跡』2003 遠賀町文化財調査報告書 第15集
- 註6. 遠賀町教育委員会『島津・丸山古墳群』1996 遠賀町文化財調査報告書 第9集
- 註7. 遠賀町教育委員会『島津・塚の元古墳群』1993 遠賀町文化財調査報告書 第6集
- 註8. 遠賀町教育委員会『豊前坊古墳群・経塚』1996 遠賀町文化財調査報告書 第8集
- 註9. 芦屋町教育委員会『浜口（月軒）廃寺』1979
- 註10. 遠賀町教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』1993 遠賀町文化財調査報告書 第5集
- 註11. 岡垣町教育委員会『幕ノ尾遺跡群』2002 岡垣町文化財報告書 第22集
- 註12. 遠賀町教育委員会『尾崎・友田遺跡』1999 遠賀町文化財調査報告書 第11集

III. 調査の内容

1. 概要

町内遺跡分布調査の中で、既存の1～10号横穴墓の所在確認も含め、舌状丘陵の南側斜面を中心とし、トレンチを設定し、確認調査を行った。各トレンチは開口していた横穴墓の位置や地形を考慮して等高線に平行して設定し、横穴墓に関連する遺構であると判断した時点で掘り下げを止めている。今回の調査は、あくまでも既知の横穴墓の位置関係と丘陵上の横穴墓の分布状況の把握を目的としていたため、調査による遺構への影響は最低限にとどめるよう努めている。そのため、今回の調査結果を得たとしても、各横穴墓の築造時期や構成単位等の詳細を知り得る資料は少ないといえる。

丘陵上に設定した各トレンチにより、丘陵南側斜面で新たに8基、東側斜面では位置関係のみ押さえられていた19～22号横穴墓の他、新たに1基の横穴墓を確認した。前回調査時の報文で述べられているが、今回の調査においても、一墓道に複数の墓室を持つ横穴墓でも1基と捉えている。また、当横穴墓では、1つの墓道（主墓道）に3墓室を有する例が多く、中央の墓室を1号墓、主墓道から中央の墓室に向かって右の墓室を2号墓、同じく左の墓室を3号墓とし、基本的に○-1号墓と呼称する方法を採用しているが、各横穴墓の全容を把握できた箇所が無いため、複数の横穴墓がある場合は、便宜的に○-1号墓等としているものもある。また、昭和42年の調査で発見された横穴墓については、各墓室単位で番号が付されており、位置関係からみても同一の横穴墓の単位と考えられるものでも、そのままの番号を踏襲して使用している。今回の報文では、混乱を避けるためにも各横穴墓の番号の振り直し等は行わず、新規発見のものには新たに番号を付した。今後、鬼津横穴墓群の詳細がある程度明らかになった段階で、番号を整理しなおす必要がある。また、今



第2図 既存の調査区と今回の調査範囲 (S=1/2,500)

回の調査では、平成 15 年度に一部発掘調査した 11 ~ 18 号横穴墓については、自然崩壊本調査の対象とした 13 号横穴墓を除き、埋め戻し土の掘り下げ等は行っていない。第 2 図に平成 15 年度調査時の範囲と、今回の分布調査・自然崩壊本調査に伴い地形測量を行った範囲を示している。また、第 3 図には今回の調査で作成した地形測量図の中に、前回の調査範囲を合成し、赤で示しているので後章で述べる各横穴墓の調査成果とあわせて参照していただきたい。

今回の調査で発見した横穴墓については、既に開口していたものも含め、調査記録の作成と地形測量図への記入を終えたものから開口部を土甕やコンパネ等で塞ぎ、埋土により埋め戻しを行っている。自然崩壊本調査の対象とした 13 号横穴墓（13-1 号墓）については、特に玄室天井部の陥没穴付近の崩落が著しかったため、玄室内に丸太材を利用した支柱を立てて崩落防止措置を施し、開口部を塞いだ後に埋め戻しを行った。また、東側丘陵下段の調査では、畑の造成に伴う削平で搅乱された箇所を調査したため、トレンチの位置のみ測量図に記した。

2. 遺構と遺物の概要

今回報告する鬼津横穴墓群で検出した主な遺構と遺物は、次のとおりである。

<遺構>

- ・横穴墓 24 基

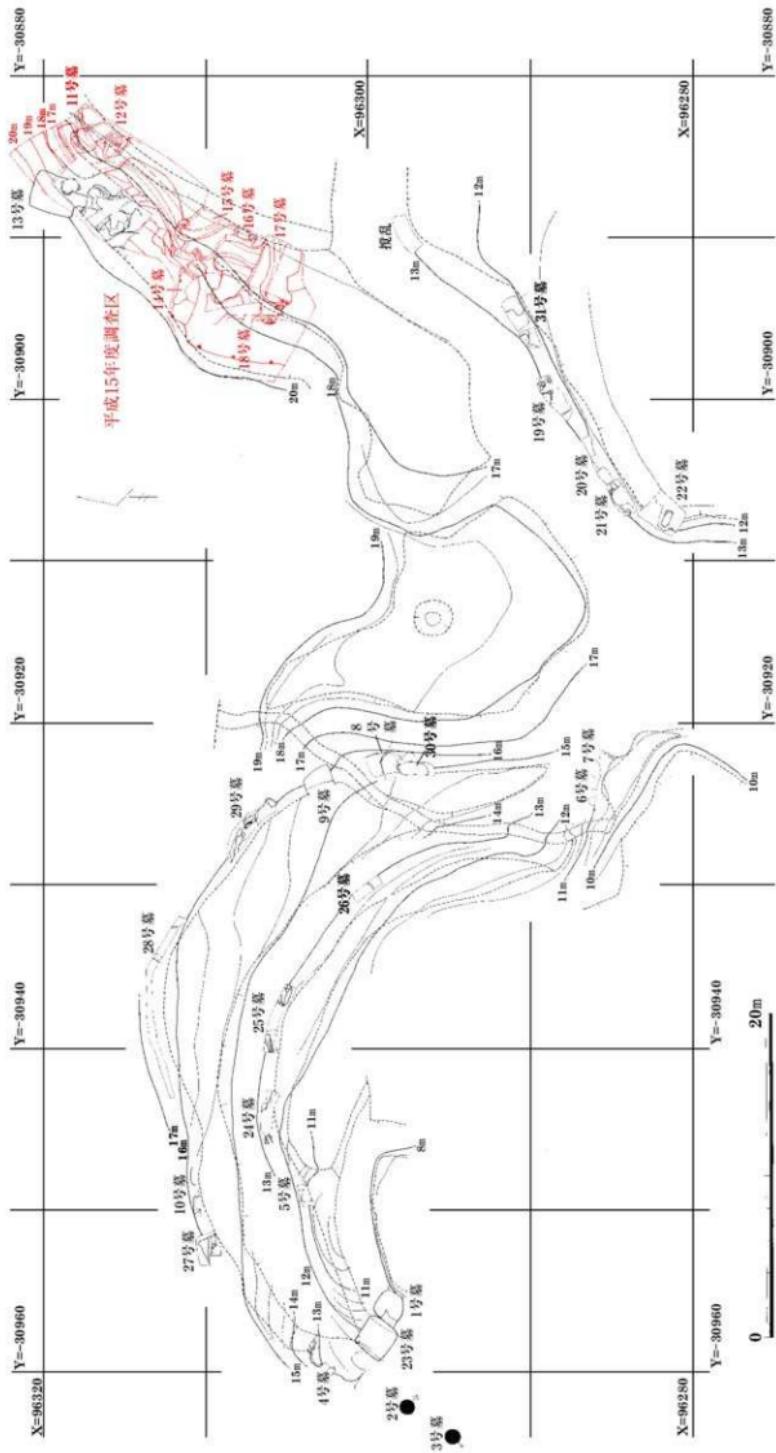
<出土遺物>

- ・土師器 ・須恵器 ・瓦器 ・青白磁 ・陶磁器 ・鉄器 ・石器 ・鉄滓

なお、今回の調査で出土したものではないが、昭和 42 年の分布調査時に採集された遺物が未整理のまま保管されていたため、今回の報告書に含めて一部を紹介している。



丘陵東側斜面下段の調査風景



第3図 地形図および鬼津横穴墓群遺構配置図 (S = 1/300)

3. 各横穴墓の調査成果について

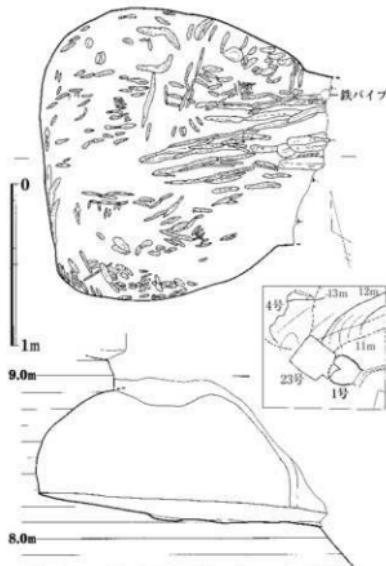
1号横穴墓（第4図、図版1・2）

調査区の西端付近の低所、標高8mに位置する横穴墓で、すぐ南に隣接する家屋が建てられる際に行われた地下げで天井部の大半と羨道が削平され、消滅している。自然崩壊本調査の対象とした横穴墓のうちの1基で、調査前は長年月の降雨や風にさらされて遺存部が徐々に崩壊しつつあったため、開口部に鉄製の支柱を埋め込み、上部の崖面に沿ってブルーシートで被覆してある状態であった。

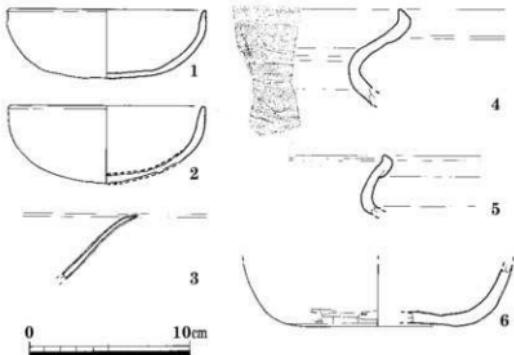
1号横穴墓はN-75°-Eに開口する横穴墓で、玄室の平面形は奥壁側に膨らむ巾着形を呈し、規模は主軸で長さ1.53m、最大幅1.80mを測る。玄室内に堆積した土砂を床面まで掘り下げたが、壁面に沿った排水溝や尻床などは見られなかった。天井部は大半が消滅するが、床面から丸味をもって立ち上がるドーム形を呈し、高さは現存する部位で最高0.79mを測る。羨道は大半が消滅しているが、遺存部で長さ0.20m、幅1.09mを測る。羨道から玄室にかけては、奥壁側に6°の勾配を持つ。玄室の床面を中心に、羨道部にかけて築造時につけられた幅1~3cm大の盤状の工具痕が多数残る。墓室内に堆積した土砂の中には近現代の瓦等も含まれていたが、須恵器を主体に土師器の壊などが出土した。また、遺存する天井部から僅か20cmの厚さを隔てて、後述する23号横穴墓が築かれる。

出土遺物（第5・6図、図版15）

1、2が土師器、3が青白磁、4~20が須恵器である。1、2は壊で、どちらもほぼ完形で半球状の器形となり、口唇部を外につまみだす。1は少し平底気味で、口唇部はやや尖り気味になる。内外面ヨコナデだが、他はマツメのため調整不明。3は碗の口縁部片で、底部から口縁端部まで緩やかに湾曲し、端部で外折する。内面底部付近の釉薬は濃緑黄色だが、他は淡緑黄色で、釉薬の厚さは0.3mmを測る。4は壺の口頸部片で、頸部は大きく外反し、口唇部を上方につまみだす。頸部内面に同心円当て具痕が残り、回転ナデでナデ消す。口唇部内面に1本線のヘラ記号が残る。5も口頸部片で、口唇部は端部を外に折り曲げて肥厚させる。6は平瓶の底部片であろう。外面の底部付近に静止ヘラケズリを施す。7~20は壺片である。7・8は同一個体で、頸部は短く、く字状に外反して口唇部をつまみだす。口縁下に低い台形突帯を貼り付け、頸基部付近に板状工具の小口痕が



第4図 1号横穴墓実測図 (S = 1/30)



第5図 1号横穴墓出土遺物① (S = 1/3)

は、18のようなく密に残るものもある。15の内面には平行當て具痕が残る。15、19の外面上には濃緑褐色の自然釉が器壁を覆い、調整が不明瞭。7の破片は19号横穴墓の出土品と接合した。

築造時期の指標となるのは7や10で、時期の比定は難しいが、6世紀後半から末頃になろう。1や2から7世紀後半頃まで追跡が行われたと考えられる。

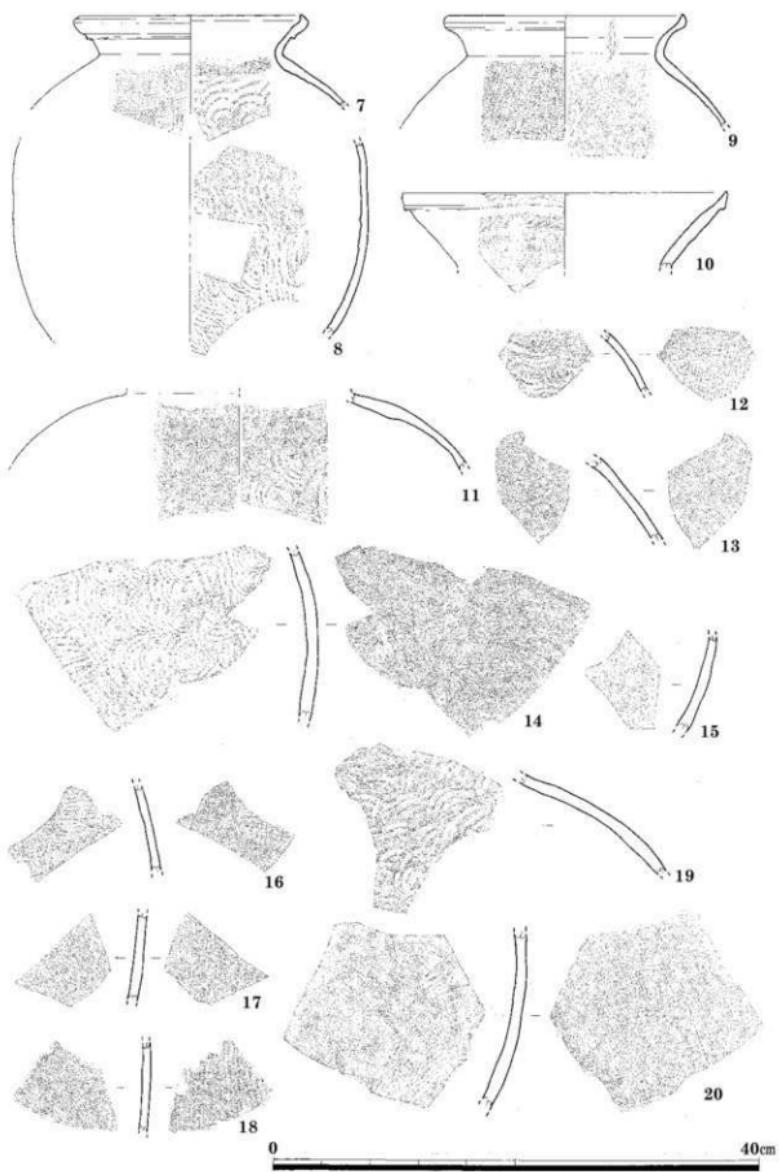
2号横穴墓（図版2）

1号横穴墓の西5m、標高約14mに位置する横穴墓で、S - 50° - Eに開口する。当横穴墓のすぐ南が切立った崖面で、2・3号横穴墓に至るまでは倒壊した大木の上を足場とする以外になかったため、安全面を考慮して調査や地形測量は行わず、横穴墓の羨門の位置と開口方向のみ記録した。倒壊した大木の末端が2号横穴墓の羨門を半分以上塞いでいたため墓室内の観察は行えていないが、昭和42年に調査された際の記録によると、玄室の平面形は方形で、長さ・幅1.1m前後を測る。天井部の構造は不詳である。玄室の奥壁北側が開口して、3号横穴墓の東側壁に続いているようだ。遺物は出土していない。

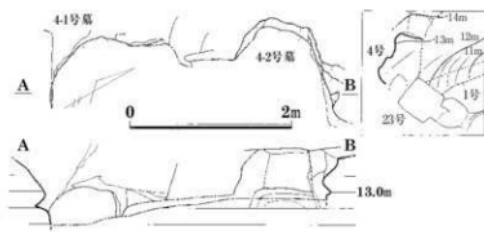
3号横穴墓

2号横穴墓の南西に隣接して、S - 44° - Wに開口する横穴墓を発見した。2号横穴墓同様、調査や測量が困難な場所であったため、羨門の位置と開口方向のみ記録した。羨門に大量の土砂が堆積していたため掘り下げ等は行っていないが、昭和42年調査時の調査記録によると、玄室の平面形は縦長方形を呈し、主軸長2.5m、奥壁側で幅1.85mを測り、床面の壁際には排水溝がめぐる。また、玄室の壁面には床面から70cmの高さに軒先線が造り出され、断面三角形状に天井部が削り出され、床面からの高さは1.15mを測る。羨門は偏平な板石で閉塞された状態が記録されるが、現状は埋土のため確認できなかった。出土遺物はない。

残る。頸部以下の内面に残る同心円當て具痕は、弱い回転ナデでナデ消す。9は口縁部から肩部片で、口唇部は丸味をもつ。10は口頸部片で、尖り氣味の口唇部の下位に1条の突帶を貼り付け、その下位に刺突文を刻む。11・14は同一個体で、外面上は平行叩き目後カキメを施し、内面に幅広の同心円當て具痕が残る。12～20は胴部片である。内面に同心円當て具痕、外面上に平行叩き目が残るものが多い。内面に残る當て具の幅



第6図 1号横穴墓出土遺物② (S = 1/4)



第7図 4号横穴墓実測図 ($S = 1/60$)

を検出した。羨門部を掘り下げていないため詳細は不詳だが、両横穴墓が造られた位置や開口方向等を考えると、両者は一群である可能性があるため、4号墓を4-1号墓、北に隣接する墓室を4-2号墓とした。

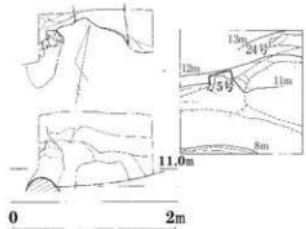
4-1号墓は $S - 60^\circ - E$ に開口する横穴墓で、墓室の圓化は行っていないが、玄室は平面方形で、主軸長約2m、幅1.9mを測り、床面には各壁に沿って排水溝を巡らせる。天井部は丸味のあるドーム形で、高さは現床面から0.9mを測る。壁面には床面から40~50cm上方に軒先線を削り出す。羨道部は幅0.85m、南側で長さ1.06mを測る。羨道天井部は、岩盤崩落のため天井部が消失しているが、現床面から46cmを測る。

4-2号墓は羨門飾り縁の上部を検出した時点で調査を終えたため、玄室の状況などの詳細は不明である。検出した羨門上部の飾り縁部分で、幅72cmを測る。

両墓室とも遺物は出土していないため、築造時期等については不詳である。

5号横穴墓 (第8図、図版4)

4号横穴墓から東に8m、丘陵中段の林道が北東方向に分岐する標高11mに位置する。羨門部のみ検出したが、砂岩の岩盤の風化が顕著で、飾り縁は確認できなかった。羨門は上半部ほどしか検出していないが、台形状になると思われ、上部で幅58cm、現床面からの高さ30cmを測る。墓室の観察は十分行えなかつたので不詳であるが、羨道は $S - 16^\circ - E$ に伸展し、玄室側で幅62cmを測る。羨門の西側には幅約40cm、長さ65cmに渡って砂岩が南に伸展しており、羨門との位置関係を考えると、墓道の一部を構成している可能性がある。出土遺物はないが、前回の分布調査で6世紀後半頃の須恵器の蓋が報告されており、造墓の下限をこの時期に求められる。



第8図 5号横穴墓実測図 ($S = 1/60$)

6・7号横穴墓(第9図、図版4)

舌状丘陵の南斜面の南端、標高10m前後の低所に、羨門部が露出した3基の横穴墓が隣接して所在する。昭和42年の調査時に3基のうちの中央の墓室が6号横穴墓、東に隣接する墓室が7号横穴墓として報告される。6号横穴墓の西に隣接する小型の横穴墓については記録がないが、6号横穴墓に隣接して築かれることから脇室と判断し、6号横穴墓を6-1号墓、当横穴墓を6-2号墓として報告する。

6-1号墓はS-14°-Wに開口する横穴墓で、玄室の平面形は横長方形を呈し、長さ約1m、幅約1.5mを測る。天井部はドーム形を呈し、高さは現床面から約80cmを測る。羨道は玄室側に広がる形状で、入口側で幅69cm、玄室側で幅84cmを測り、長さは西側で48cmを測る。玄室の壁面には、いたるところに盤等の掘削痕が残る。羨門は縦長の半円形になると考えられ、幅8~18cmの飾り縁が明瞭に残る。羨門の幅は現床面の下端で70cm、現床面から高さ34cmを測る。

6-2号墓はS-17°-Wに開口する小型の横穴墓で、玄室の平面形は奥壁幅の狭い台形状を呈し、長さ48cm、幅は奥壁側で40cmを測る。羨門は縦に伸びる半円状を呈し、現床面の下端で幅64cm、現床面からの高さ30cmを測る。飾り縁はない。

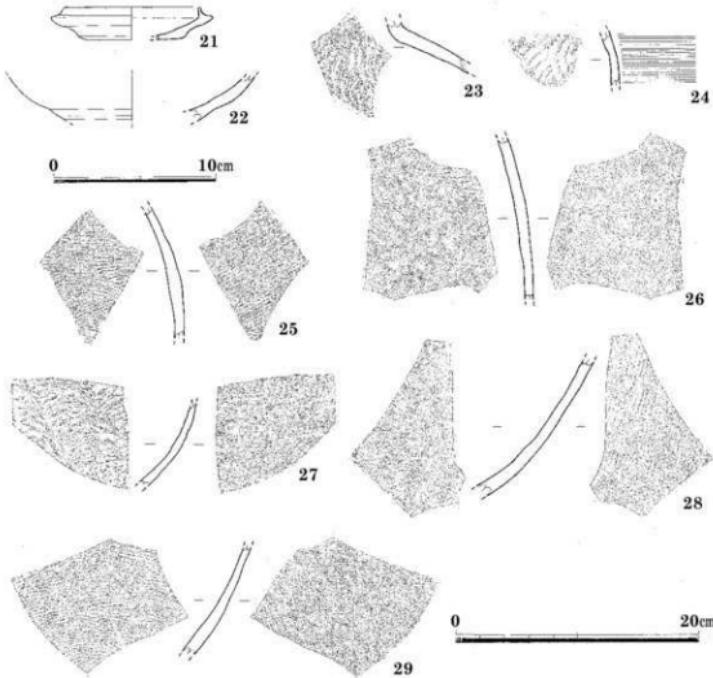
7号横穴墓はS-50°-Wに開口する横穴墓で、玄室天井部の岩盤が崩落して完全に入口を塞いでいる。そのため、玄室の観察は行えていない。羨道は天井崩落部の隙間からスタッフで計測したところ、北側で長さ約1mほどとなる。幅は墓室入口側と崩落部側とともに現床面で68cmを測る。羨門は上部の岩盤が崩落し、全体を検出してないため形状を判別し難いが、縦長の半円形となる。羨門の幅は現床面の下端で70cm、岩盤遺存部までの高さ50cmを測る。羨門には幅4~8cmの飾り縁が削り出され、西側の4割ほどが遺存する。

ここで報告した3基の横穴墓については、位置関係等を考慮すると、墓道を共有する同一の単位群を構成している可能性がある。当横穴墓の所在する付近から須恵器片を表探した。

出土遺物(第10図21~29)

いずれも須恵器である。21は坏身で、立ち上がりは基部が太く短く直立し、受け部は厚い。底部はヘラ切り後に雑なナデ仕上げ。22は脚付器種の体部で、内外面ともに回転ナデ。23~29は壺・甕の破片で、23は頸部片、24~29は胴部片である。内面に同心円當て具痕の残るもの(23、24、26、27)と平行當て具痕の残るもの(25、28、29)、外面上には平行叩きの残るもの(25~27、29)と格子目叩きの残るもの(28)があり、外面上の叩き目はカキメやナデで部分的にナデ消す。

造墓の時期を示す資料とはいえないが、21が7世紀初頭から前半に比定でき、使用時期の一端を窺うる資料である。



第10図 6号横穴墓付近表採遺物 (S = 1/3, 1/4)

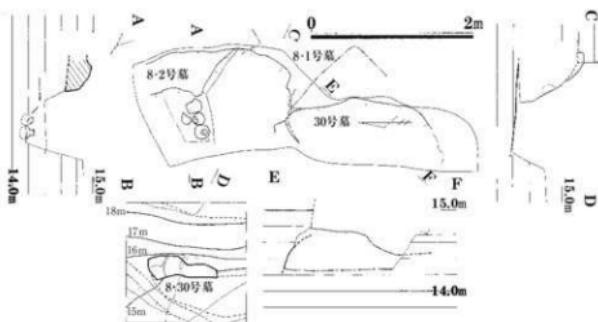
8・30号横穴墓 (第11図、図版5)

6・2号墓の西1mから北側丘陵上に伸びる里道の半ば付近、丘陵が南に湾曲する標高15mに位置する。当該地で地上に横穴墓が開口していたのでトレンチ調査したところ、3基の横穴墓を発見した。昭和42年調査時に8号横穴墓として登録されたのは、中央の墓室である。この墓室の北には隣接して墓室が造られており、墓室の造られた高さや開口方向、位置関係等を考慮すると、同一の単位群を構成すると考えられたため、8号横穴墓を8-1号墓、北に隣接する墓室を8-2号墓とした。また、8-1号墓の南側を掘り下げるところ、玄室の一部と考えられる岩盤の立ち上がりを確認した。前述した2基とは墓室の造られた高さや開口方向が異なることから、別の単位群を構成する横穴墓と考え、30号横穴墓とした。

8-1号墓はN-68°-Wに開口する横穴墓で、玄室内の固化や堆積土の掘り下げ等は行っていないが、玄室は平面横長の方形を呈し、規模は主軸長約1.6m、幅約1.7mを測り、床面の壁際には排水溝が巡る。直立気味に内傾する壁面には、現床面から約40cmの高さで軒先線を造り出し、そこから天井部にかけてドーム状の断面となる。現床面から天井部まで約60cmの高さである。羨道は南側で長さ62cm、幅は玄室側で62cmを測る。天井部は岩盤が崩落しているため一部しか残

らす、床面からの高さ70cmを測る。

8 - 2号墓は、8 - 1号墓の北に墓室を接して築かれた、N - 74° - Wに開口する横穴墓である。墓室内の調査は行っていないが、玄室の平面形は方形を呈し、主軸上で長さ約1.85m、幅約1.8mを測る。床面には8



第11図 8・30号横穴墓実測図 (S = 1/60)

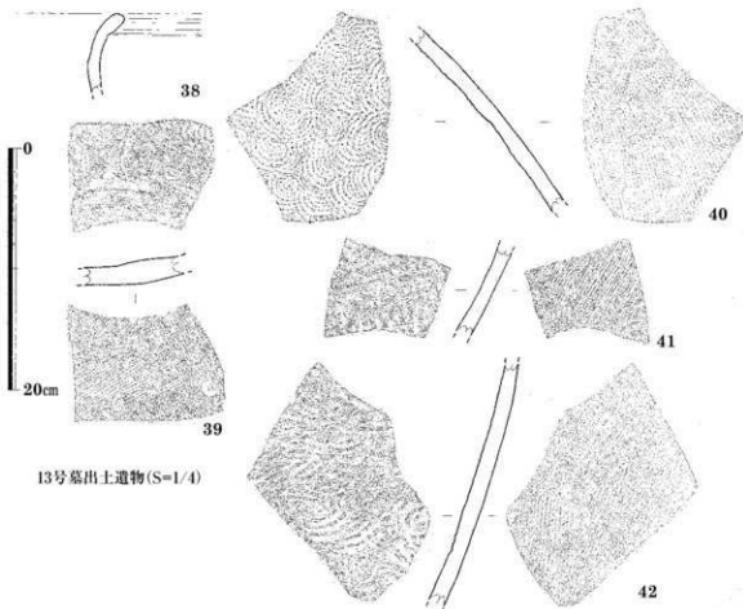
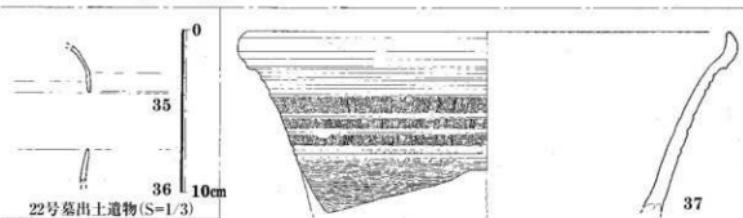
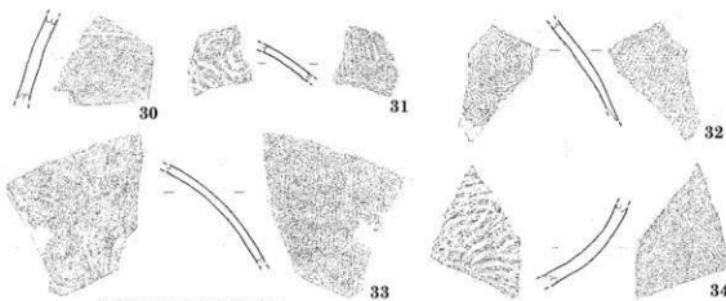
- 1号墓と同様、壁面に沿って幅6~7cmの排水溝が巡る。壁面は内傾気味に直立し、途中で軒先線を造り出した後、ドーム状の天井部となる。玄室の規模は8 - 1号墓より大きい造りである。天井部は玄室の南西隅から崩落しており、羨道部の状況が不明であった。墓室前には地山と考えられる淡黄褐色砂岩土が堆積しており、当初は羨道の床面かと考えていたが、開口した墓室の天井部まで高さは40cmほどしかなく、形状についても不明であった。そのため、検出面の西側を一部深く掘り下げたところ、60cm下方で完形の平瓶2点を含む須恵器の一群を検出した。この平瓶2点は正位の状態で配置され、他に平底気味の瓶状の須恵器が底部を上に向けて出土した。この土器群の出土状況に加え、掘り下げ部の東側で横穴墓の羨門と考えられる岩盤の立ち上がりを検出したことから、8 - 2号墓の墓室前に広がる砂岩土は、一部崩落した羨道天井部の遺存部であると判断した。検出した羨門は台形状で、下端幅70cm、上端幅48cm、高さ72cmを測る。この掘り下げ部で検出した土器群については、墓前祭祀等で供献された状態を留めている可能性があり、今回の調査では土器群の全体を検出していないことから、出土状態の記録を残すにとどめた。土器の取り上げは行わず、調査終了後に埋め戻している。この土器群が8 - 2号墓の墓道上に置かれたものと考えると、8 - 1号墓の墓道より約40cm下方に墓道が掘り込まれていたと考えられる。

30号横穴墓は8 - 1号墓の南に隣接しており、玄室天井部の大半が崩落した状態を検出した。丘陵裾部への横穴墓の築かれ方を考えると、墓室は南北方向に開口していたと思われる。玄室の平面形は西壁がやや膨らむ方形か長方形となり、天井部は僅かに残る壁面からドーム状になると考えられる。玄室内床面は途中で掘り下げを中止しており、幅は掘り下げ面で奥壁側1.2m、最大幅1.34mを測る。羨道部の状況等は不明である。当横穴墓の埋土を中心に遺物が出土した。

出土遺物（第12図30~34）

いずれも須恵器の壊片で、30が口頭部、31~33が肩部、34が底部付近の破片である。30の頭部には向きを違えた連続斜線文が刻まれ、施文後に一条の沈線が入る。31~34の内面には、32を除いて幅広の同心円當て具痕が残る。31以外は30号横穴墓の埋土から出土した。

8号墓については、出土品から横穴墓の使用時期等を判断する資料はないが、墓道に供献された土器群から7世紀代まで追葬が行われたと考えられる。30号墓については、30がその一端を示し

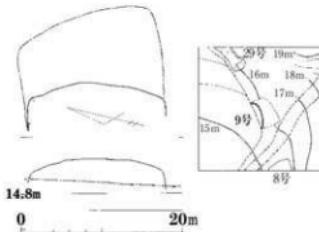


第12図 8・30号、13、22号横穴墓出土遺物 ($S = 1/3, 1/4$)

ており、6世紀末頃の時期に比定できる。

9号横穴墓（第13図、図版6）

8-2号墓から里道を挟んで北2.5mの位置に、墓室内に大量の土砂が流入した横穴墓を発見した。墓室内部の掘り下げは行っていないが、S-71°-Wに開口する横穴墓で、玄室の平面形は奥壁と南側壁に丸味をもつ方形、天井部はドーム形を呈す。現床面で計測した玄室の規模は、主軸長1.37m、幅は奥壁側で1.68m、最大幅1.78mを測る。玄室の遺存状況から考えて、天井部の岩盤が一部崩落して消滅していると考えられる。羨道や墓道等は検出しておらず、墓室開口部前に埋没していると予測される。出土遺物はない。



第13図 9号横穴墓実測図 (S = 1/60)

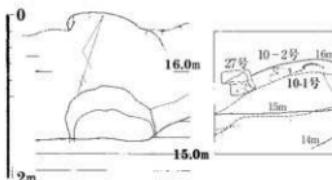
10号横穴墓（第14・15図、図版6）

9号横穴墓から西25m、4-2号墓から北東12mの丘陵上段の標高15.5mで、東西に隣接する2基の横穴墓を検出した。昭和42年に発見された10号横穴墓は東側の墓室で、両者の位置関係や開口方向等を考えると、同じ単位群を構成すると思われる。10号横穴墓を10-1号墓、西に隣接する墓室を10-2号墓とする。両墓室とも丘陵斜面に沿って堆積土を除去したのみで、墓室内部の掘り下げは行っていない。

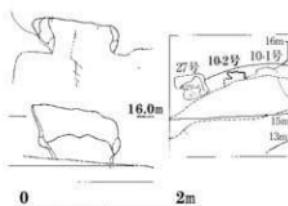
10-1号墓はS-19°-Eに開口する横穴墓で、開口部から墓室内を観察したところ、玄室の平面形は横長の隅円方形を呈し、主軸長約1.4m、幅2.6mを測る。天井部はドーム形となり、現床面から高さ約60cmを測る。羨道は現況で長さ13cmと短く、幅は入口側で1.0mを測る。現床面から天井部までの高さは、最大35cmとなる。

10-2号墓は略真南に開口する横穴墓で、開口部からの観察では、玄室の平面形は横長の方形を呈す。

主軸長は約1.2mを測り、幅は未計測のため不明。現床面から天井部までの高さは約80cmで、内傾気味に直立する壁面には軒先線が削り出され、そこから天井部はドーム形となる。羨道は西側で長さ約75cm、入口側で幅76cmを測り、現況で床面から天井部まで約30cmの高さがある。横穴墓の入口上部の状態を考えると、10-1号墓も含めて両横穴墓の羨道部の天井は、岩盤の崩落により消失している可能性が高い。両墓室とも遺物は出土していない。



第14図 10-1号墓実測図 (S = 1/60)

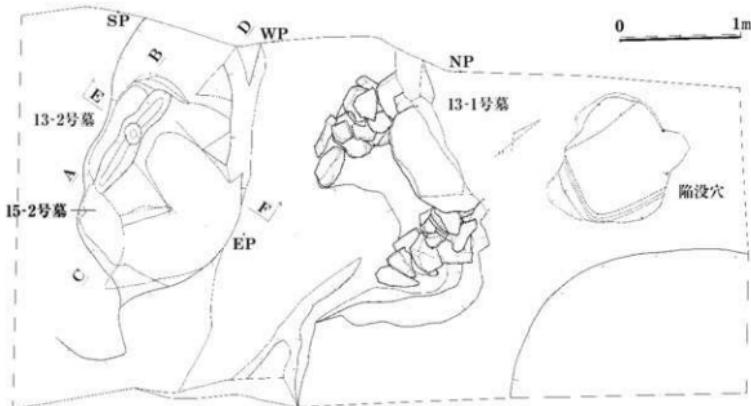


第15図 10-2号墓実測図 (S = 1/60)

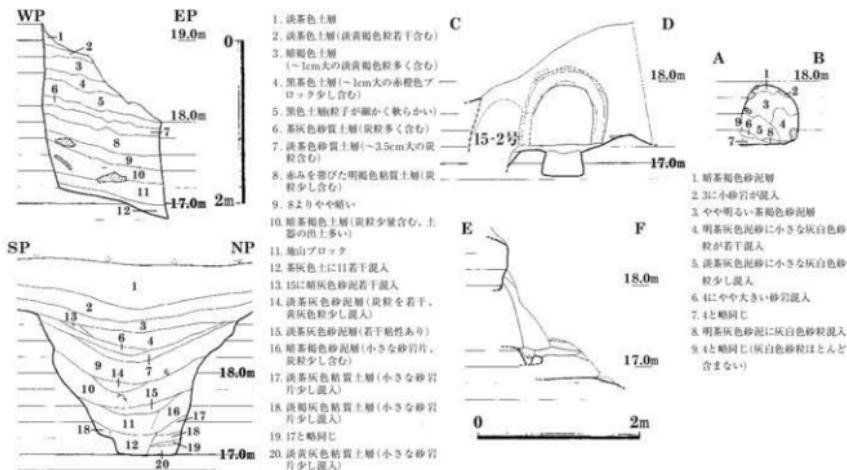
13号横穴墓（第16～18図、図版6～9）

調査区の北東端、標高16.6mに位置する。平成15年の12月に、地権者が当該地付近に畑を開墾するため竹林を造成していた際に、横穴墓の玄室天井の一部が陥没したことを契機として、当横穴墓の所在する丘陵東側斜面の一部が発掘調査された。当時の調査の契機となった陥没穴のあいた横穴墓が13号横穴墓（13-1号墓）で、部分的ではあるが、石組みの羨道側壁を形成している状況が確認された。羨道側壁から西で検出した墓道は更に奥へと伸展し、墓道を挟んだ反対側に発見した横穴も含め、横穴墓の单位群の造営の契機となった主墓室の存在が予測された。13-1号墓は調査終了後に陥没穴の内部に土壌を充填して埋め戻しを行ったが、後年の降雨等で次第に充填部が沈下し続けていた。この陥没穴から徐々に天井部岩盤の崩落範囲が広がり、自然崩壊して消滅する危険性を考慮して、1号横穴墓と同様に玄室内から羨道部を含めた本調査を行い、調査の記録を残すこととした。当時の調査では墓道を挟んだ位置にある横穴に番号が付されなかったが、今回の調査で発掘範囲を拡張し、羨門までの状況を確認できたため、13-2号墓として報告する。また、両墓室が取りつく墓道については、主墓道として記述する。

主墓道はトレンチ内で長さ3mに渡って検出した。砂岩の岩盤を底面として、南東から北西方向に向けて直線状に伸展し、底面は緩やかな勾配の傾斜をもつ。前回報告書でも報告されたが、墓道の南東側は丘陵の造成時に搅乱されて一部不詳な点もあるが、南東側から北西側に幅を広げて伸展していたと思われる。主墓道底面の幅は、南東側の搅乱部で32cm、北西部壁面で70cmを測る。前回調査の報文中に主墓道の土層堆積状況について一部触れられているが、主墓道の下部が埋没した後に13-2号墓が埋まり、順次土砂が堆積した後、今回報文中の8層が堆積した時点で15-2号墓の天井部岩盤が崩落し、堆積土の一部が墓室内に流れ込んでいる。13-1号墓についての記述はないが、主墓道最下層の12層が埋没した後に墓室が掘り込まれており、8層の堆積が始まる前に羨道側壁間に土砂が埋没していることから、この時点で墓室の使用を終えたと考えられる。主墓



第16図 13号横穴墓実測図 (S = 1/40)



第17図 13号横穴墓主墓道土層図、13・2号墓実測図 (S = 1/60)

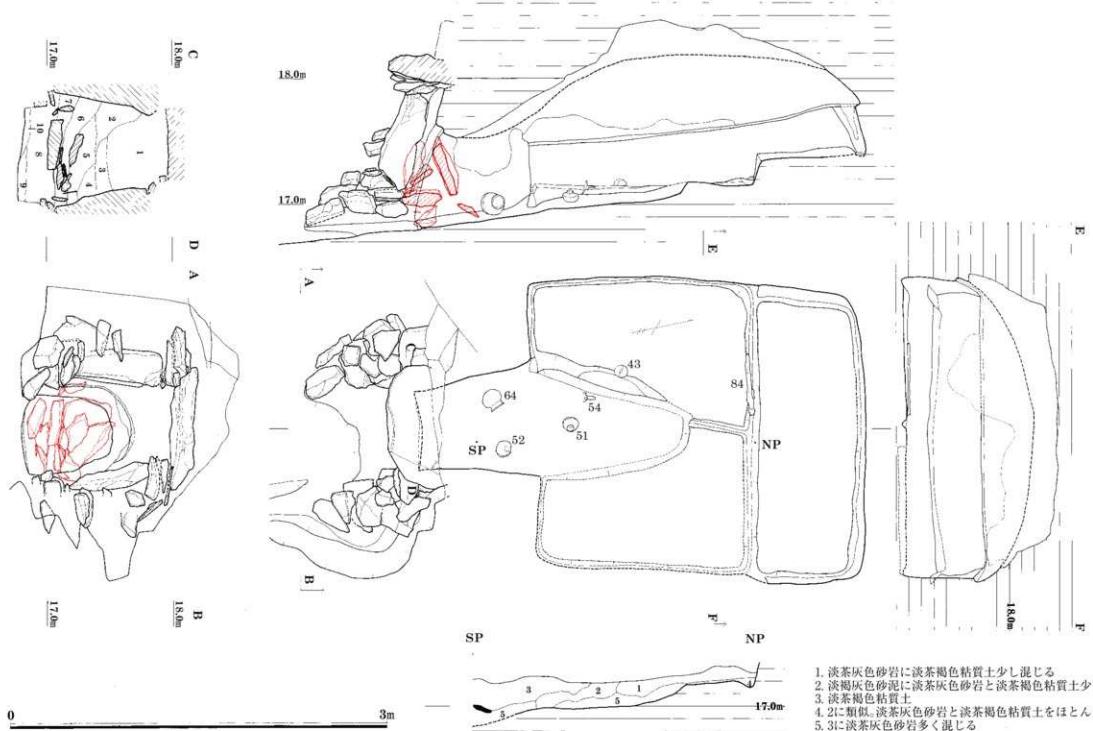
道の堆積層のうち、8・9層と10層を中心に須恵器を中心とした遺物が出土しており、遺物の出土が主墓道の北西壁面に集中していることから、未検出の主墓室に伴う遺物と考えられる。9・10層には羨門の閉塞等に使用されたと考えられる長さ40cmの大砂岩の偏平石が奥から流れ込んだ状態で検出された。

13-1号墓はS-15°-Wに開口する横穴墓で、羨道部に石組みの側壁と天井石をもち、羨門を閉塞石で閉塞した状態であった。玄室の天井部には1.2m×1.0m大の陥没穴が開口し、開口部は玄室の南東隅部にある。玄室の平面形はやや外に膨らむ縱長方形で、主軸長2.69m、幅は入口側で2.16m、奥壁側で2.20m、最大幅2.39mを測る。玄室の東壁から入口にかけては、床面の掘り下げ時に一部掘りすぎた箇所があるため、破線で復元して図化している。玄室の奥には屍床が造り出され、床面から19cmの高さで奥壁に向かって4.5°の傾斜をもち、周囲に幅10~16cm、深さ2~6cmの排水溝が巡る。屍床の長さは、段の上端から排水溝の内側までの主軸上で78cmを測る。屍床の周囲を巡る排水溝は屍床前の床面でも壁際に沿って巡り、屍床の中ほどで玄室入口側に分れて伸び、羨道の傾斜に合わせて掘り込まれた掘り込み面へとつながる。排水溝は幅4~11cm、深さ3cmを測る。掘り込み面は玄門に向けて長さ1.28mに渡って丸味のある長台形状に掘り込まれ、奥壁に向けて7.5°の傾斜をもち、床面との高低差は入口側で20cm、屍床側で9cmを測る。屍床や掘り込み面を除いた玄室の床面は、比較的の水平に近く造られる。玄室の壁面は内傾気味に垂直に掘り込まれ、床面から34cm~40cmの高さに軸先線を削り出し、そこからドーム形の天井部を形成していたと考えられる。玄室天井部は岩盤の崩落が著しく、天井部は一部しか遺存しておらず、屍床上の遺存部で高さ69cmを測る。天井部岩盤の遺存部をもとに破線で天井部を復元しており、床面から天井までの高さは約1mほどとなるだろう。天井部の崩落は一部羨道にも及ぶ。墓室内の羨道は、主

軸上で長さ 0.8m、幅は入口側で 63cm、玄室側で 94cm を測り、玄室側にかけて広がりをもち、床面は玄室入口の掘り込み面向て 7.5° の傾斜をもつ。羨道天井部の高さは、岩盤の遺存部で 0.68m を測る。羨道の入口には隅丸台形状の羨門が遺存し、羨門の周囲には幅 9 ~ 12cm、深さ 3 ~ 6cm の縦長半円形を呈す飾り縁が造り出される。羨門は下端部で幅 63cm、上部で幅 37cm、高さは 88cm を測る。羨門は硬質砂岩の偏平石で閉塞されており、羨門下から標高 17.1m までは石材を寝かせ、それより上位は羨門を塞ぐよう石材を立てて積み重ねられていた。この羨門の前面には、長さ 82 cm に渡って左右に石組みの羨道側壁が築かれる。羨道側壁は基底部に長さ 30cm 大の厚みのある石材を左側壁で 5 石、右側壁で 4 石配置し、その上に長さ 30cm 前後の偏平石を積んで左右で高さを揃えた後、羨門側に縦長の石材を積み上げる。縦長の石材は、左側壁側が長さ 80cm、幅 30cm、厚さ 26cm を測り、右側壁側よりも大きな石材を使用する。左側壁では、縦長石材を配置した場所の墓室側の岩盤が僅かに掘り込まれており、石材を安定させるために掘られたものと考えられる。縦長の石材の上部には更に長さ 30cm 前後の偏平石を積み重ね、標高 18.0m 付近で左右側壁の高さを揃えた後、長さ 50cm 以上、幅 99cm、厚さ 23cm の大石を天井石として架構する。羨道床面から天井石端部の下までの高さは 1.28m を測る。天井石の上部では、一部未掘部分があるが左側壁側の上方に狭小な範囲で僅かに傾斜する平坦面を検出した。左右の羨道側壁には一部未掘部があるため不詳な点が残るが、側壁に積み上げた偏平石の間隙の所々には小振りの石材を積んで高さを調整している。左右側壁の縦長石材の前面下位で検出した偏平石については、上部から転落したものではなく、旧態を留めている可能性がある。右側壁側では主墓道にやや斜行した側壁の掘り方が検出されており、側壁の基底石は掘り方の形状に沿って配置された状態である。左右の羨道側壁間の床面には主墓道に向けて緩やかに下降する墓道が掘り込まれる。

13 - 2 号墓は主墓道を挟んで 13 - 1 号墓の反対側に造られた横穴墓で、羨門の前面までを検出した。羨門は縦に長い半円状で、周囲に幅 10cm ~ 13cm の飾り縁が削り出される。羨門の南側下半は、15 - 2 号墓の玄室天井部の岩盤が崩落したのに伴い、一部が消失している。羨門の幅は下端で復元幅 76cm ほどになると思われ、床面からの高さは 73cm を測る。羨門の前には長さ 99cm、幅 23 cm、深さ 8cm の溝が掘り込まれ、溝内の羨門中央付近には直径 23cm、深さ 20cm の円形ピットが残る。この溝の前方には N - 79° - E に伸展する掘り込みがあり、溝の下まで続いている。前回調査の報文の中で横穴として記述されたのはこの掘り込みのこと、羨門前の床面から 30cm 下位に掘り込まれ、幅は下端で 50cm、長さは 86cm まで掘り進めたが、更に若干伸展する。壁面は下端から内傾し、奥側は一部天井のような構造をもつ。この掘り込みは墓室の開口方向と同じで、奥側は羨門前に掘り込まれた溝内のピットの底面が貫通していると考えられる。この遺構の性格については不明である。掘り込みの主墓道側の底面と主墓道の底面には 12cm ほどの高低差がある。

- 黄褐色土層(炭鉱)1mの大白色石粒若干含む)
- 黄褐色土層
- 黄褐色土層(やや粘性あり)
- 黄褐色土層(より粘性あり)
- やや堅固な黄褐色土層(やや粘性あり)炭鉱の含有が多い)
- 黄褐色土層(3.0と堅同じ)炭鉱など含まない)1mの大白色石粒若干含む)
- 黄褐色土層(3.0と堅同じ)炭鉱など含まない)1mの大白色石粒若干含む)
- 黄褐色土層(若干粘性あり)若干堅固あり)炭鉱若干含む)
- 黄褐色土層(灰色砂を帯びる若干粘性あり)

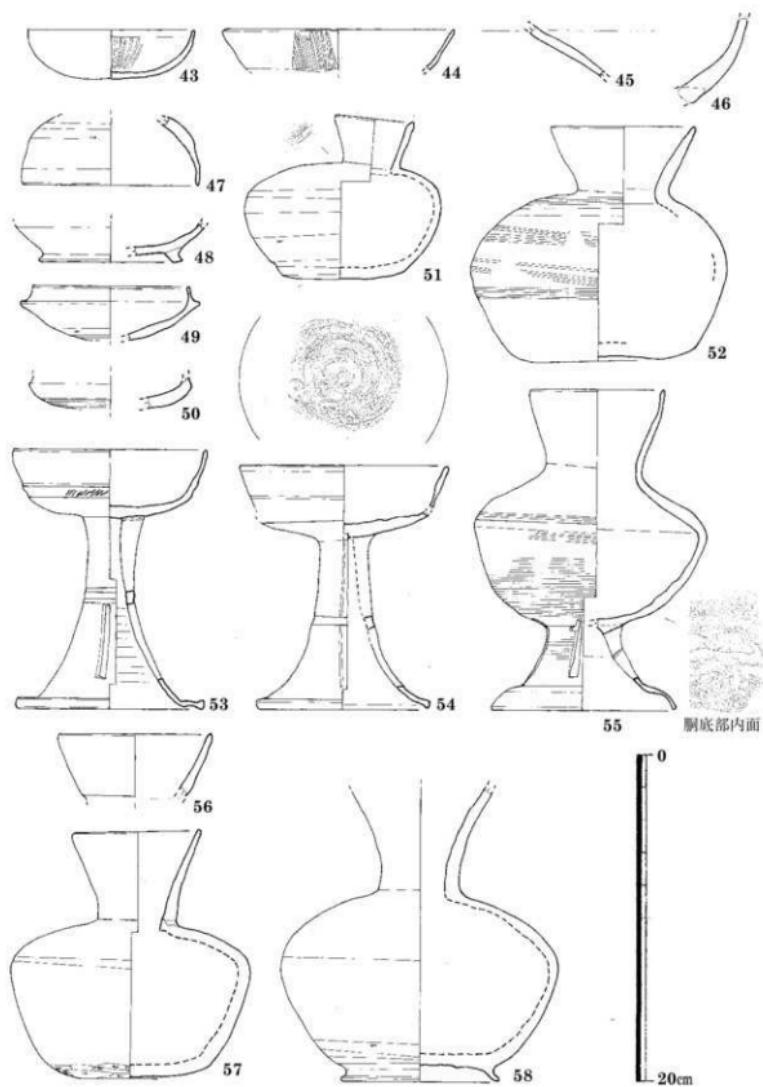


- 淡茶灰色砂岩に淡茶褐色粘質土少し混じる
- 淡褐灰色泥に淡茶灰色砂岩と淡茶褐色粘質土少し混じる
- 淡茶褐色粘質土
- 2C:類似、淡茶灰色砂岩と淡茶褐色粘質土をほとんど含まない
- 3C:淡茶灰色砂岩多く混じる

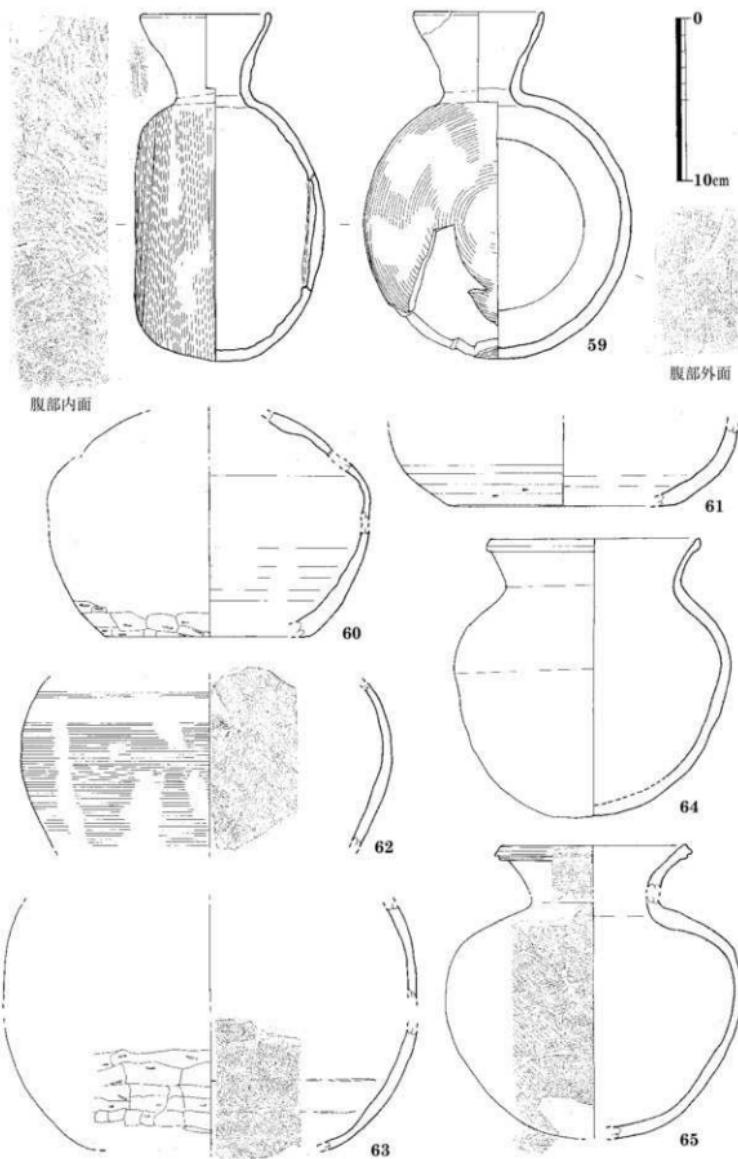
第18図 13-1号墓実測図 (S = 1/30)

出土遺物（第12図37～42・19図～第23図、図版15・16）

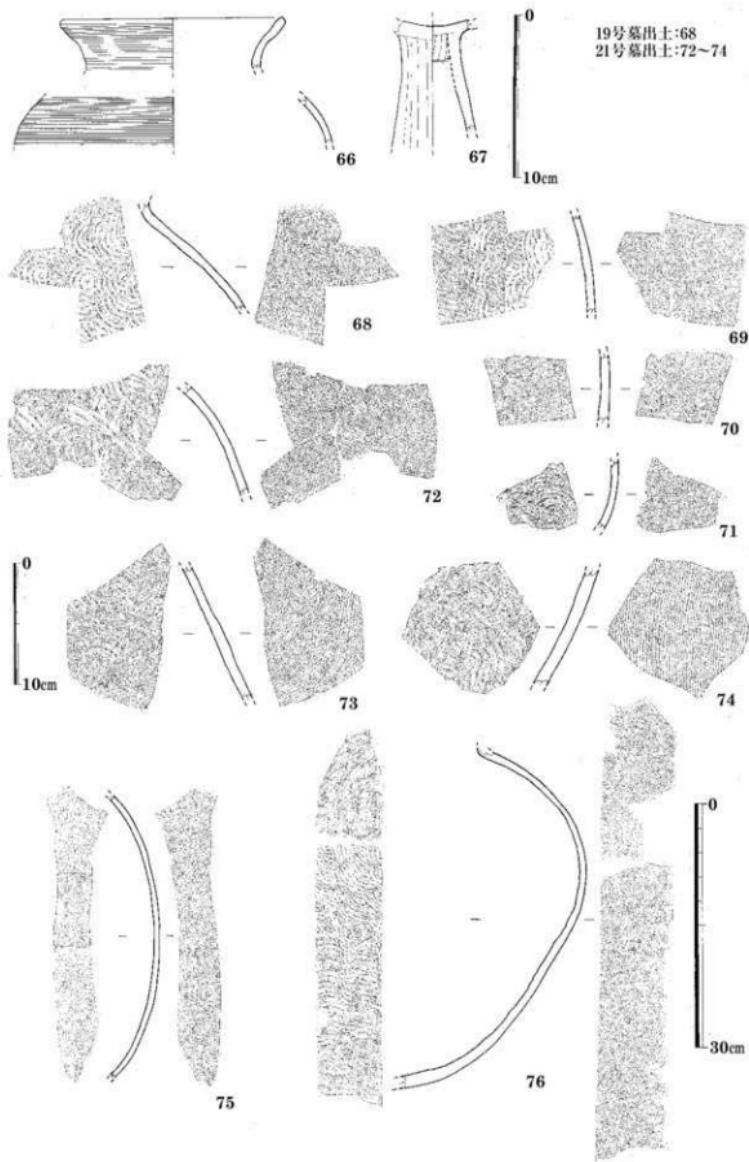
37～42、44、47～66、69～71、75～80は須恵器である。37～42、69～71、75、76、78～80は壺や甕の破片で、37、38が口頸部、それ以外は肩～底部にかけての破片である。37は長頸の甕の口縁部で、頸部は緩やかに外湾し、口唇部を内湾させてつまみ上げる。口縁部外面には一条の突帯を貼り付け、その下に明瞭な三条の凹線が入る。凹線下にはカキメを施した後、ヘラ先でやや左下がりの連続斜線文を刻み、四条の凹線で文様を区画する。38は壺か小型の甕の口縁部片で、口唇部を肥厚させて端部は丸味をもつ。肩～底部にかけての破片の多くは、内面に同心円の当て具痕が広く深く残るもののがほとんどで、当て具の幅が狭く浅いものは71、79のみである。70と80には、内面に平行當て具痕が残る。破片の外面には平行叩き目が残るものが多く、カキメや回転ナデ、ナデで消すものが多くみられ、41と42に格子目状の叩き目が残る。75の底部付近には、内面の当て具痕をナデ消した際に指頭圧痕が残る。76は頸基部から底部にかけての破片で、胴部はやや上位に最大径があり、底部は若干平底気味となる。79の内面には、金属製の刃物でつけられた2条の沈線が残る。47は坏蓋で、高さのある器形で肩から天井部にかけて回転ヘラケズリを施す。48は高台付きの坏身片で、体部側に貼り付けた高台は高く外に踏ん張り、端部は外方に僅かに反り返る。49は坏身で、薄く垂直気味の立ち上がりと水平で丸味のある受け部をもつ。底部は回転ヘラケズリ。44と50は無蓋高坏の坏部の破片である。44は薄手のつくりで、外面には右下がりの凹線状の連続斜線文が入る。50は坏身の屈曲部から脚との接合部にかけての破片で、接合部付近にカキメを施す。51は小型の平瓶で、平底で腹部がやや尖り気味の体部に、ほぼ同じ厚みで直立気味に立ち上がる口頸部がつく。頸基部に直線2本のヘラ記号が入る。体部下半から底部にかけて回転ヘラケズリを施す。52も平瓶だが、やや大型の個体である。口頸部は基部から厚みを減じて直線的に外に立ちあがる。体部は頸基部から中ほどにかけてカキメを施し、下半から底部にかけては雑なナデ仕上げで指頭圧痕が残る。53・54はいずれも長脚二段の長方形透かしを3方に配した無蓋高坏である。53の坏部は口唇端部にかけて丸味をもって立ち上がる。外面に低い2条の突線が巡り、その間にヘラ状工具の小口で刺突文を入れる。脚部は2段の長方形透かしの間に2条の凹線が巡り、脚端はハ字状に外反した後外に折れ、端部を上下につまみだして丸味をもたせる。脚部内面は強めの回転ナデ仕上げ。54の坏身の体部は屈曲が強く、稜がつく。屈曲部の上は消失するが、僅かにヘラ状工具の小口による刺突文が残る。坏身底部の内面には、同心円状の当て具痕が残る。脚部は上下の透かし間に浅く幅広い凹線が1条巡り、脚端は下方につまみだす。55は4方に長方形透かしを入れた短脚の付く壺である。前回の調査で胴部下半から脚部が出土しており、今回口縁部から胴部中位の破片が出土した。口頸は僅かに外反した後、垂直気味に上方に折れて端部を丸く仕上げる。胴部は肩付近に最大径があり、やや強く屈折する。胴部内面は回転ナデ仕上げだが、底部付近には幅広の同心円當て具痕が残る。脚部は緩やかに外反して屈折した後、内湾しながら外に広がる。脚部の透かしの切り込みは、一部壺の底部まで達する。56は平瓶等の口頸部片で、下方には僅かに浅い凹線が入る。57は長頸壺で、平底で肩の張る胴部から、口頸部は外に厚みを減じながら緩やかに広がる。外面の底部付近に静止ヘラ削りを施す。58は高台の付く長頸壺で、口縁端部を欠く。これも前回調査時に口縁部を欠失した状態で出土しており、今回その口縁部が出土した。丸味のある胴部はやや上位に最大径があり、高台付近の外面には回転ヘラケズリを施す。底部はナデ調整で、指頭圧痕が残る。薄手の高台は底部端に貼り付けられ、中位で外折し



第19図 13号横穴墓出土遺物② (S = 1/3)



第20図 13号横穴墓出土遺物③ (S = 1/3)



第21図 13号横穴墓出土遺物④、19、21号横穴墓出土遺物 (S = 1/3、1/4、1/6)

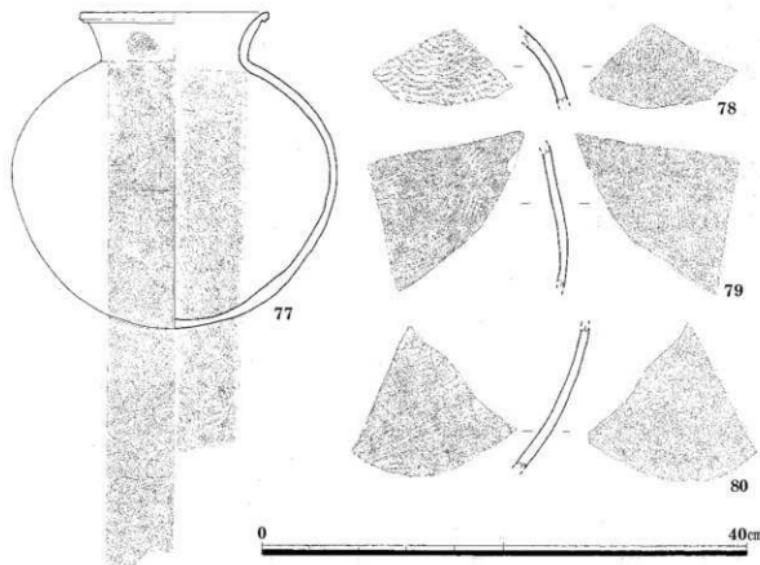
て外に踏ん張る。59は提瓶である。口頸部は緩やかに外反して立ち上がり、内湾気味に屈折して端部を丸く仕上げる。胴部は背面側が平坦で、腹部はふくらみをもつ。胴部外面は土器の形状に沿ってカキメを入れ、腹部の下半には5本線のヘラ記号が残る。腹部側の内面には同心円の当て具痕が残るが、円盤貼り付け部付近は当て具痕を強い回転ナデでナデ消す。背部側も円盤貼り付け部付近は回転ナデで当て具をナデ消しており、腹・背とも円盤の内面は雑なナデ仕上げである。60、61は平瓶の破片である。60は肩～底部にかけての破片で、接合しないものの同一個体である。調整は内外面ともに回転ナデだが、底部付近の外表面は静止ヘラ削りを施す。61は底部付近の破片で、外表面の底部付近は回転ヘラケズリ。62～66、77は壺である。62は胴部の破片で、上位に一条の凹線が入り、中ほどから底部にかけてカキメを入れ、一部をナデ消す。内面には同心円当て具痕が残るが、一部をナデ消す。63は胴～底部にかけての破片で、胴部内面に残る同心円当て具痕は回転ナデによりナデ消す。底部付近の外表面は静止ヘラケズリ。底部付近の調整をみると平瓶の可能性も残る。64は完形の壺で、肩に最大径のある丸い胴部から口頸部は緩やかに外反し、端部を肥厚させる。胴部下半から底部にかけては内外面ともに粗いナデ仕上げ。65も壺だが、口縁部は小片のみしか出土していない。胴部はやや肩の張る扁球状で、底部は若干平底気味となる。口頸部は直立気味に立ちあがった後、外反して端部を外下方に曲げて突帯を貼り付ける。頸部外面には櫛描き波状文が残る。胴部下半の内面に残る同心円状の当て具痕は、ほぼ完全にナデ消される。外表面の胴部中位から底部にかけては平行叩き目をカキメで搔き消す。最大径の位置にはヘラ記号が入る。66は口頸部と肩付近の破片である。口縁端部はやや丸味のある断面方形状で、外表面にはカキメが残る。77は口縁部が1/4、胴～底部が1/2残存する。胴部は全体的に丸味のある形状で、口頸部は基部から中ほどにかけて厚みを増し、再び厚みを減じて端部を外折させ、下方にシャープな突帯を貼り付ける。頸部外面にヘラ記号が入る。胴部の内面には幅の狭い同心円の当て具が残るが、頸部と底部については当て具痕をナデ消す。

43、45、46、67は土師器である。43は壺で、完形品である。半球状の器形で口唇部は丸く、内面に弱い稜が入る。口縁部は内外面ヨコナデ、底部外面は不定方向のナデで、内面にはヘラ先の暗文が残る。45、46は壺の破片で、45は頸部、46は底部付近の破片である。どちらも器壁がマツツしているため、調整は不明である。67は高壺の柱部で、壺部と脚部を欠く。外表面は縦方向の面取りのナデ、内面は縦方向のヘラ削り後、ヨコナデを施す。

81、82は石器である。81は黒曜石の剥片で漆黒色を呈す。主墓道の10層から出土したが、混入品であろう。最大長1.83cm、幅1.52cm、厚さ5.6mm。82は砂岩の扁平な小円碟で、13-1号墓の羨門床面付近の埋土から出土した。供獻時の祭祀行為に用いられた可能性があると判断して報告した。

83、84は鉄器である。83は鉄製の弓飾り金具片で、片側端部を欠く。現存長2.14cmで、直径3.7mmの断面円形の芯の端部を叩き潰し、鍔状とする。84は13-1号墓の玄室屍床前の溝内で出土した鉄刀で、切先を左側壁側に向けた状態で出土した。切先を欠くも遺存状況は良好で、現存長47.0cm、刀身長現存長39.9cm、茎長7.1cmを測る。刀身の幅は関付近で最大3.17cm、厚さ6.1mm、欠損部付近で幅2.39cm、厚さ4.1mmを測る。刃こぼれなどは特に見られない。関は銹化のため不詳な部位もあるが、ナデ関であろう。茎は関から茎尻にかけて幅や厚みを減じ、端部で幅8.2mm、厚さ1.2mmを測る。目釘孔については銹のため確認できなかった。茎の端部付近には鉄製の把金具が銹着する。把金具は厚さ0.8mmの鉄板を折り曲げた横長の円筒状を呈し、最大で長さ2.1cm、幅3.12cmを測る。刀身側から茎端にかけて緩やかに広がり、端部は鉄板を1.5mm程外に折り曲げている。把金具の継ぎ目には刀身に平行する木質が一部遺存する。現重量は460gを測る。

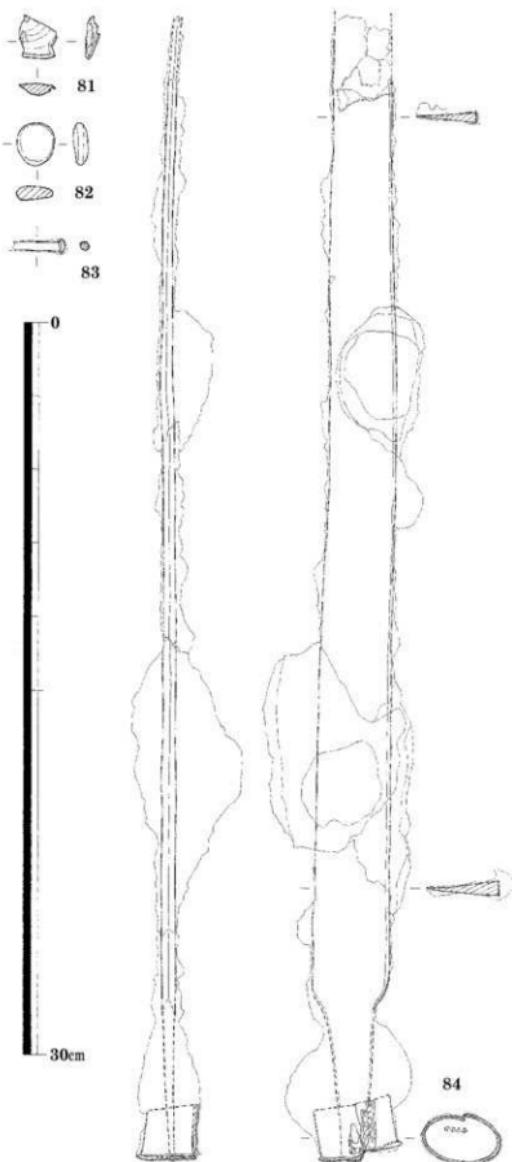
出土遺物については、13-1号墓の玄室内で出土した43、51、52、54、64、84を除き、大半が13号横穴墓の主墓道からの出土である。また、玄室内で出土した54については、口縁部の破片が



第22図 13号横穴墓出土遺物⑤ (S = 1/4)

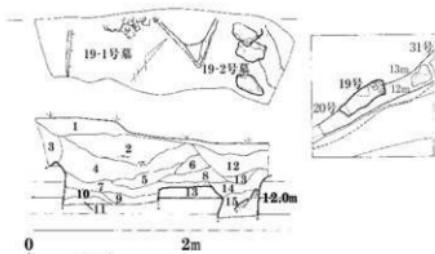
主墓道の8・10層から出土している。前回の調査終了後に玄室内の陥没穴付近を埋め戻した際の埋土の中には、38、44、67、76が含まれていた。この他、今回図化はしていないが、主墓道の調査区壁面付近の10層からは、計約300gの鉄滓が複数出土している。各出土遺物の出土層位については、出土遺物観察表を参照していただきたい。

13-1号墓については、玄室内で出土した54が築造時期の一端を示しており、器形の特徴から6世紀後半頃のものと考えられる。また、43の壺や51・52の平瓶、64の壺等はこれよりも新しい時期の特徴を示しており、漢門の閉塞状況を考慮すると最終時の追葬に伴う品と考えられる。これらの遺物は7世紀前半から中頃に比定され、主墓道での土層の堆積状況とも合致する。主墓道の出土遺物は8・9層と10層を中心に出土地おり、出土品には6世紀後半から7世紀後半にかけての品が含まれる。墓道の堆積状況をみると、下位にある10層に古い時期の品が入ると考えられるが、追葬に伴う墓道の掘り直しが行われたようで、8～11層にかけて同一個体の破片が含まれていた。13-1号墓と13-2号墓の状況を考えると、調査区



第23図 13号横穴墓出土遺物⑥ (S = 1/2)

外にある未検出の主墓室は約1世紀に及ぶ期間使用されていたと考えられる。13-2号墓については、墓室内が未調査のため使用期間は不明であるが、主墓道の出土遺物から判断して、7世紀後半より前には使用を終えたと考えられる。



1. 表土(薄灰色土) 2. 喀茶灰色砂泥層 3. 明茶褐色泥砂層 4. 茶灰色砂泥に褐色岩若干、減少し混入 5. 明茶灰色砂泥層 6. やや暗い茶灰色砂泥層 7. 5に大さめの砂岩が多く混入 8. 4に砂岩が若干混入
9. 喀茶灰色泥砂層 15に少し混入 10. 9に砂岩が少し混入 11. 淡茶灰色砂泥層 12. 茶灰色泥砂層 13. 12に小さい砂岩が混入 14. 7と略同じだが小さい砂岩が少し混入 15. 14にやや大きい砂岩が多く混入

第24図 19号横穴墓実測図 ($S = 1/60$)

可能性が高いため、墓道のみの検出ではあるが、西側の墓道を19-1号墓、東側の墓道を19-2号墓とする。

19-1号墓の墓道はS-64°-Eに伸展し、トレンチ内で検出した墓道の幅は、上端部で最大1.6mを測る。墓室側の堆積土の中からは、須恵器の壺片を主体とする遺物が出土している。

19-2号墓の墓道はS-39°-Eに伸展し、幅はトレンチ内で検出した上端部で最大1.08mを測る。墓道内からは40cm×30cm大の硬質砂岩の偏平石が3石出土しており、壁面にも2石あることが確認できた。墓室側の墓道幅は掘り下げ面で50cmと狭いことから、石組みの羨道側壁に伴うものと考えるよりも、閉塞等に使用された石材の一部と捉えた方が良いだろう。

出土遺物（第21図68、25図85～95）

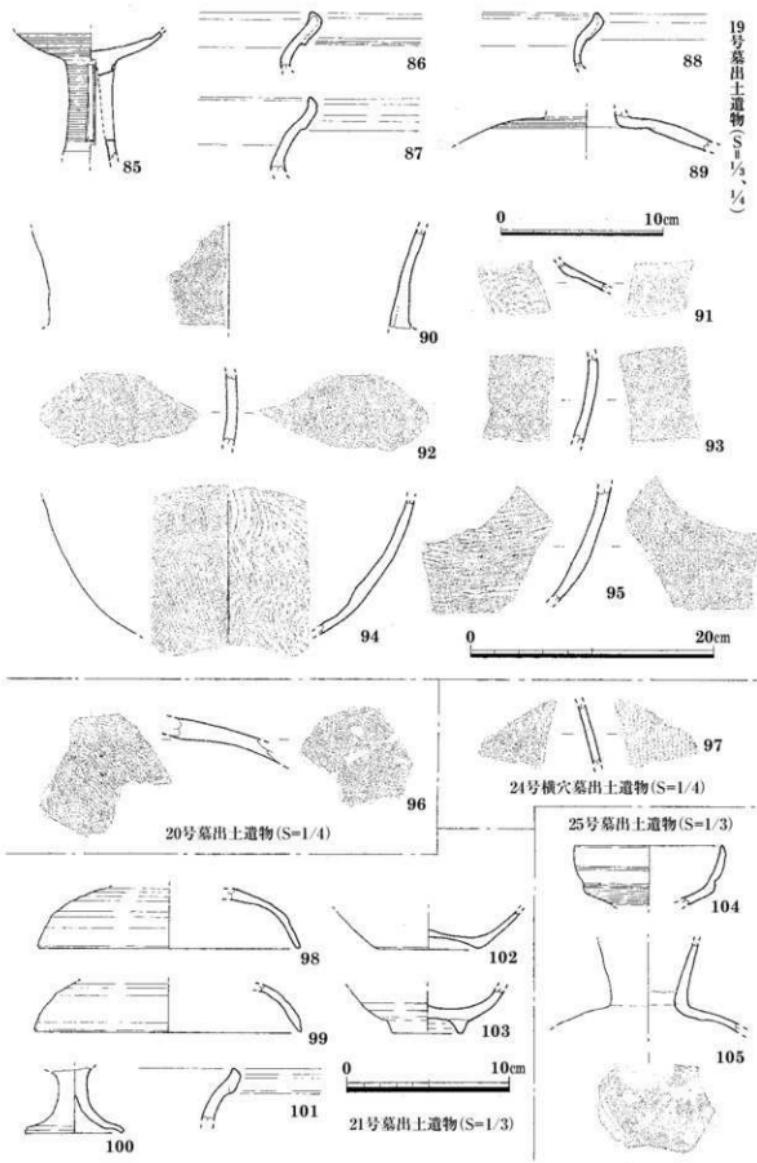
68、85～95はいずれも須恵器である。85は長脚二段高环の柱部の上半部で、3方に長方形の透かしが入る。86～88は壺や瓶類の口縁部で、口唇端部を上方につまみだし、外面を肥厚させる。89は壺の頸部で、頸基部外面にカキメを施す。90は壺の口頸部片で、下端は粘土の継ぎ目で剥離する。外面にやや左下がりの連続斜線文が入る。68、91は壺・甕の頸部片である。内面の同心円当て具痕は頸基部でナデ消し、平行叩き目の残る外面にはカキメを施す。92～95は甕の胴～底部片。95の内面には平行當て具痕が残る。この他、19-1号墓を中心に土師器や須恵器の小片が多く出土し、鉄滓も僅かに出土した。

19-1号墓では墓室の時期を窺い得る遺物として85や90があり、6世紀後半から末頃にその一端を比定できる。19-2号墓については不詳である。

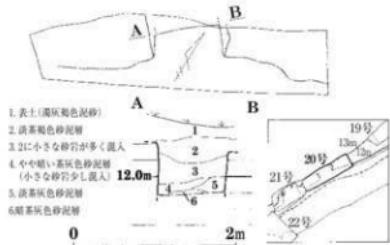
19号横穴墓（第24図、図版9）

調査区内の丘陵が西から湾曲して南に折れ、北東方向に伸展する南東斜面の丘陵裾部、標高12mに位置する。後述する20～22号横穴墓を含めて、平成15年度の調査時に位置情報が記録された横穴墓である。当該地付近には、固結堆積岩の露出している箇所が多くみられる。

トレンチ内では岩盤を略垂直に掘り込んでハ字状に伸びる墓道を2ヶ所検出した。それぞれ別の横穴墓に伴うものと考えられ、前回調査時に19号横穴墓と報告されたのは西側の墓道である。両者の位置関係を考えると同一の単位群である



第25図 19～21号、24・25号横穴墓出土遺物① (S = 1/3, 1/4)



第 26 図 20 号横穴墓実測図 (S = 1/60)

出土遺物（第 25 図 96）

須恵器の壺の頸部片で、内面に幅の狭い同心円當て具痕が残り、頸基部は回転ナデで當て具痕をナデ消す。

時期を比定できる資料ではないため、詳細は不詳である。

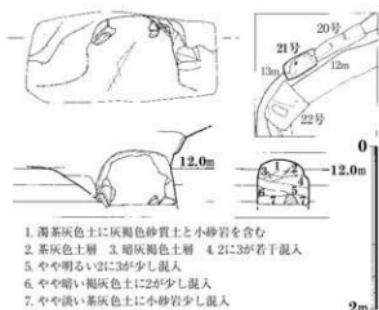
21 号横穴墓（第 27 図、図版 10）

20 号横穴墓の南東に隣接して、飾り縁のある羨門と墓道の一部を検出した。羨門は一部岩盤が崩落しているため形状を判別し難いが、上部に丸味をもつ縱長の半円形を呈すと考えられる。飾り縁も一部崩落しており、現存部で幅 9cm ~ 17cm を測り、東側上部が台形状に幅広く造られる。羨門は掘り下げ面の下端で幅 73cm、高さ 60cm を測る。羨門左右の飾り縁の前面では、長さ・幅ともに 20 ~ 30cm 大の硬質砂岩の偏平石が羨門側に立てかけられた状態を検出した。偏平石は羨門西側で 2 石、東側で 3 石あり、さらに下部まで遺存するようだが、羨門

の高さを考えるとそれほど深くまであるとは考え難く、また、羨門の高さを考えると、側壁と呼べるほどの基底石を配置している可能性も低い。羨門の前方では、長さは短いが墓道を検出した。墓道は S - 45° - E に伸展し、掘り下げ途中ではあるが、東側の下端で長さ 72cm、反対側の下端変曲点までの幅 1.14m を測る。墓道の壁面は、東側で内傾気味に直立して掘り込まれた状況を確認出来る。羨門前を中心に、堆積土内から遺物が出土した。

20 号横穴墓（第 26 図、図版 10）

19 - 1 号墓から西南西 3m、標高 12m の位置で横穴墓の墓道の一部を検出した。墓道と判断した時点で掘り下げを止めたため不詳な点が多いが、墓道は S - 37° - E に伸展し、入口側で幅 86cm、高さは掘り下げ面から西側の墓道上端面まで 62cm を測る。墓道内の土砂の堆積状況は、上部から流れ込んだ土砂が自然堆積した状況を示している。墓道の埋土内から須恵器の小片が出土した。

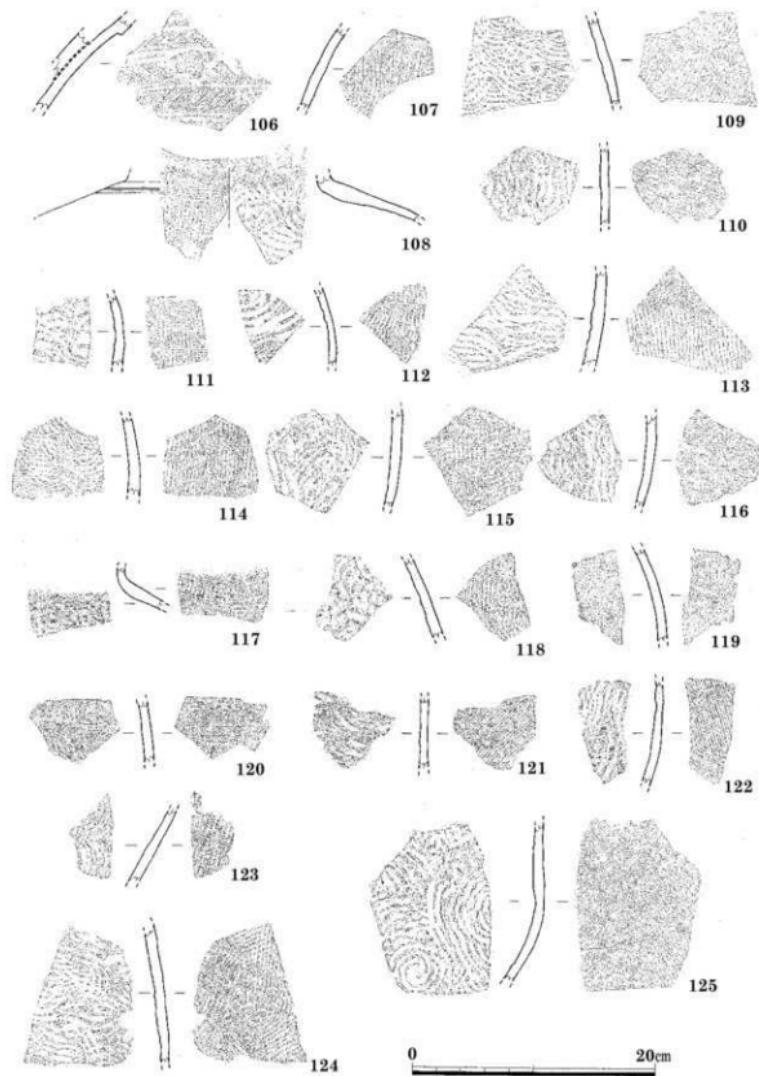


第 27 図 21 号横穴墓実測図 (S = 1/60)

出土遺物（第21図72～74、25図98～103、第28図）

72～74、98～101、106～125は須恵器、102は瓦器、103は陶磁器である。72～74、106～125は壺片である。106、107は口頸部片である。106は頸部に2ヶ所2条の凹線があり、区画内に向きを違えた連続斜線文が3段入る。口縁端部は僅かに残るが、端部外面を肥厚させ、突帶状に仕上げる。内面には別個体の壺片が、外面には土塊が溶着し、破断面に砂粒が溶着していることから、焼き台として転用されたものと考えられる。107は小片であるが、外面に垂直な連続直線文を施し、上下に2条の凹線を入れて文様を区画する。108は頸基部から肩部にかけての破片で、内面には幅広で深い同心円当て具痕が残り、平行叩き目の残る外面の頸基部付近にはカキメを施す。72～74は同一個体の破片で、内面に残る同心円当て具痕は部分的に回転ナデでナデ消し、外面の平行叩き目は、カキメやナデで部分的に消される。109～124はいずれも別個体の壺片である。破片の大半が内面に同心円の当て具痕、外面に平行叩き目後カキメを施す。同心円当て具の幅が狭く密に残るものと幅広のものがあり、122のように部位によって当て具の幅や深さが異なるものも含まれる。98、99は坏蓋で、肩部に僅かに段がつき、口唇端部は丸く仕上げる。100は小型の無蓋高壺の脚部で、端部付近を下方につまみだし、端部を丸く仕上げる。101は壺の口縁部小片で、口縁端部を外面に折り曲げて肥厚させ、上端を内方につまみだす。102は碗であろう。内外面ともに回転ナデ仕上げで、底端部は丁寧に面取りする。103は碗である。高台の基部は太く、逆台形状を呈す。器壁の表面には黄白色釉、内面には褐灰色釉がかかり、底部内面には湯白色釉が同心円状に残る。釉の厚さは0.2mmを測る。

墓室の使用時期の一端を窺い得る資料は98～100、106、107で、6世紀後半から7世紀前半にかけて使用されたと考えられる。



第28図 21号横穴墓出土遺物② (S = 1/4)

22号横穴墓（第29図、図版10）

21号横穴墓の南西3m、標高11mに位置する。トレンチ内では横穴墓の墓道と、墓道間にある直方体の石材を検出した。墓道はC-D間の土層図に現れているように、墓室側から入口に向けて広がり、北側は直線的にトレンチ外まで伸展するも、南側は途中で屈折して西に伸展する。掘り下げ面での墓道の幅は60cm、変曲部で幅82cmを測る。

この墓道の間で、長さ94cm、幅46cm、厚さ30cmほどの安山岩の石材を検出した。石材の長軸方向は墓道の開口方向に平行しており、石材の下部は更に掘り下げることが可能である。今回の調査では石材の下部まで掘り下げを行っていないため、これが本来の状態を保っているか不詳だが、通常考えて不自然な位置にあることから、旧状を保っていない可能性が高い。埋土内から僅かに遺物が出土した。

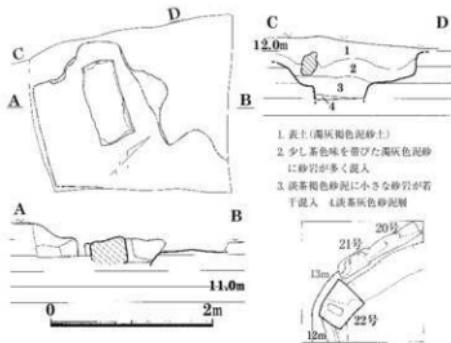
出土遺物（第12図35・36）

ともに須恵器で、35は壺蓋、36は壺や瓶類の口縁部片である。35の口縁部は直立気味に立ち上がり、内面に僅かな段が残る。

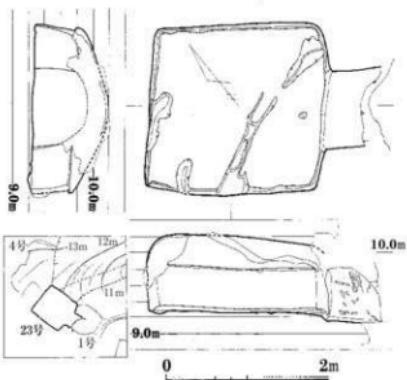
墓室の使用時期については不詳だが、35が造墓の時期の下限となろう。6世紀後半に比定される。

23号横穴墓（第30図、図版10・11）

調査区西端の1号横穴墓の上部に掘り込まれた横穴墓で、1号横穴墓と同様、家屋を建築する際の地下げで玄室天井部の一部と羨道の大半が削平されていた。墓室はS-51°-Eに開口し、玄室の平面形は僅かに左側壁が膨らむ方形を呈す。玄室は長さ2.12m、幅は羨道側で2.02m、中央部で最大2.1m、奥壁側で1.92mを測る。床面は所々木の根で搅乱されるが、壁面に沿って幅4~7cm、深さ2cmほどの排水溝が巡る。玄室の断面形は、床面から高さ46~53cmまで壁面が内傾して立ち上がり、軒先線から天井部に向けて扁平な三



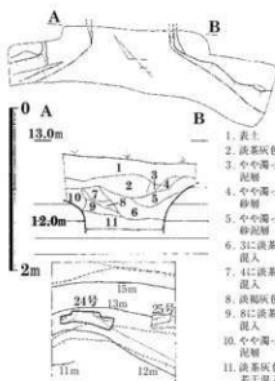
第29図 22号横穴墓実測図 (S = 1/60)



第30図 23号横穴墓実測図 (S = 1/60)

角形状に収束する。床面から天井までの高さは 0.95 m を測る。天井部は一部壁面が崩落するも、遺存状態は比較的良好である。玄門は天井側が消滅して遺存しないが、両側壁の立ち上がり方から継長の半円形を呈すと考えられる。

羨道は大半が削平のため詳細が不明だが、現存長 0.74 m、幅は玄室側で 0.96 m を測る。天井部は削平で完全に消滅しており、形状は不明だが現存する部位で高さ 0.67 m を測り、壁面には築造時に用いた鑿状の工具痕が残る。羨道から玄室に向けては 6cm の段差が設けられる。玄室内を含め、遺物は出土していない。



第 31 図 24 号横穴墓実測図 (S = 1/60)

時期を比定しうる遺物はないため、築造時期等の詳細は不詳である。

24号横穴墓（第 31 図）

調査区西の北に弧を描く丘陵の中段、5号横穴墓の東北東 5m、標高 12m で横穴墓の墓道の一部を検出した。墓道は S - 44° - W に伸展するが、東西とともに途中で外に変曲し、ハズ字形に広がる形状となる。墓道の変曲部までの長さは、東西ともに 30cm ほどで、幅は変曲部の上端で 1m を測る。墓道の形状から羨門付近の状態を検出したと考えられるが、墓室内は未調査のため、詳細は不明である。堆積土の中から須恵器の壺片が 1 点のみ出土した。

出土遺物（第 25 図 97）

赤焼きの須恵器である。壺の胴部片と考えられ、内面に残る同心円当て具痕は、ほぼ完全にナデ消される。

25号横穴墓（第 32 図、図版 12）

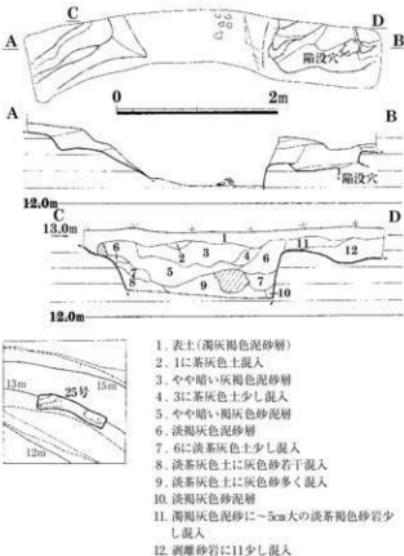
24号横穴墓の東 5m、ほぼ同じ標高で横穴墓の墓道を検出した。墓道は略真南の S - 2° - E に伸展し、墓室側から入口にかけて西側が狭まる形状となり、そこから西に変曲して 24号横穴墓の墓道へと続く形状となる。東壁はさらに南に伸展するようだが、墓道の上端が東に変曲して伸展することから判断しても、西壁と同じような状況になると考えられる。墓道の幅は、検出した墓室側の上端部で 2.1 m、変曲点側で 1.92 m を測る。24号横穴墓にもみられるが、変曲して東西に伸びる墓道の上部には、幅は狭いが岩盤を削り出して平坦面が造りだされる。東に伸展する墓道上部の平坦面を検出していたところ、18cm × 26cm 大の陥没穴を発見した。この陥没穴の内部は空洞で、他の横穴墓の玄室内部へと続いている状況を確認した。陥没穴は小さく、周囲も更に陥没する恐れがあったため、墓室内部の観察は行っていない。ただ、25号横穴墓の墓室が築かれる高さより更に低い位置に墓室があると考えられるため、別の単位群を構成する横穴墓と考えられる。墓道内か

らは、須恵器の壺片を中心とした遺物が出土した。

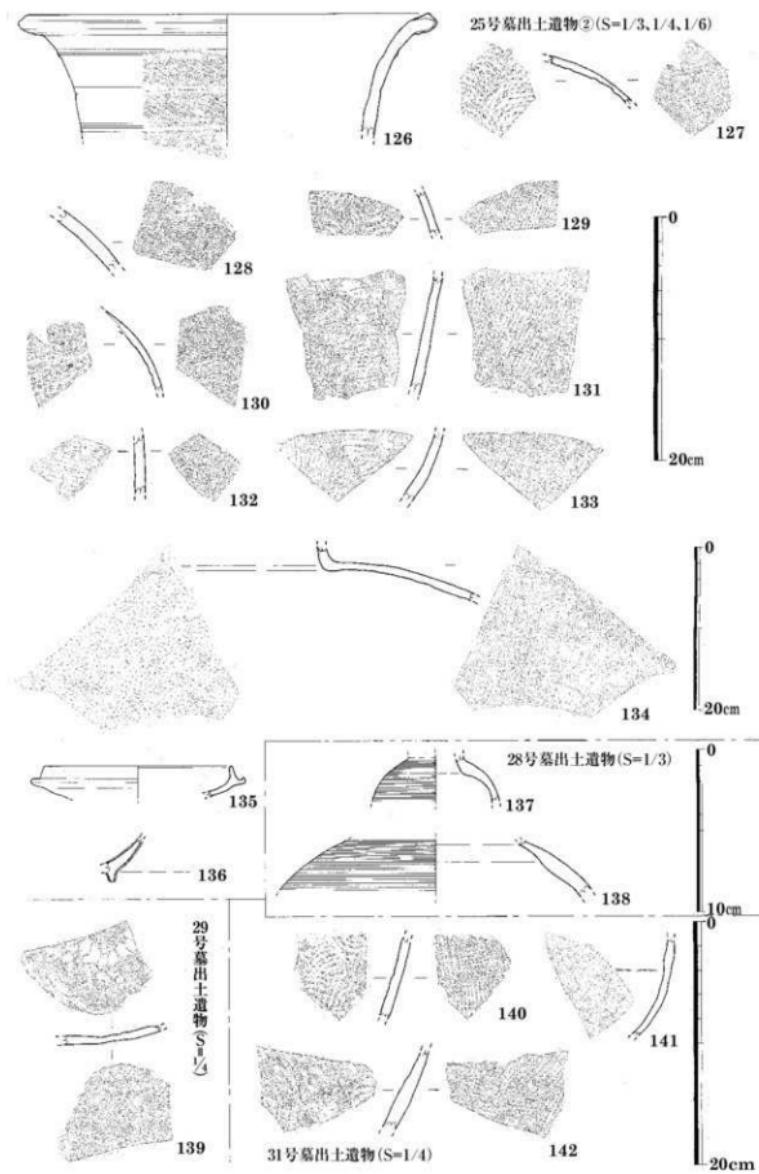
出土遺物（第25図104、105、第33図126～136）

須恵器を中心に土器が出土した。104は無蓋高杯の杯部で、杯部は下半から屈折して内湾気味に立ち上がり、端部を丸く仕上げる。屈折部の上と立ち上がりの中ほどには、外面に低い突帯が巡る。屈折部下にはカキメを施す。105は平瓶片で、頸部から肩部が残る。肩部内面には指頭圧痕が残る。126～134は壺片である。126は長頸壺の口頸部片で、頸部は口唇端部に向けて緩やかに外反し、口唇端部は内面を肥厚させて上方につまみだす。頸部には2条の凹線が3ヶ所巡り、その間にそれぞれ櫛描き波状文を施す。127～130は胴から肩部にかけての破片である。127の内面には広狭に差がある同心円當て具痕が密に残る。128は内面回転ナデで、外面にカキメが残る。他の破片と調整が異なることから、別器種の可能性もある。130は内面に残る同心円當て具痕を丁寧にナデ消しており、外面にカキメが残る。器壁が薄いことから壺等の可能性もある。131～133は胴部下半の破片である。131は内面に幅広の平行當て具痕が残る。132、133は内面に同心円當て具痕、外面に平行叩き目が残る。134は頸基部から肩にかけての破片である。肩部の器壁に比べて基部は太く、粘土を貼り付けて肥厚させた状況が破断面からわかる。内面に同心円の當て具痕、外面に平行叩き目が残り、外面には一部濃緑褐色の自然釉が付着する。135は壺身で、立ち上がりは垂直気味に立ち上がり、断面三角形状を呈す。受け部は上方につまみだす。136は青白磁の碗の破片で、高台は逆台形状を呈し、体部は外上方に向けて緩やかに伸びる。

出土遺物から時期の指標となるのは104、126、135で、6世紀末頃から7世紀中頃に比定できる。



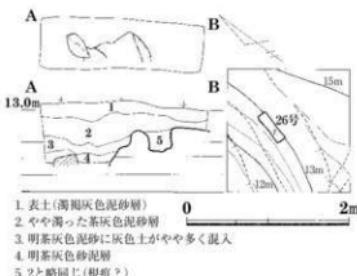
第32図 25号横穴墓実測図 (S = 1/60)



第33図 25、28、29、31号横穴墓出土遺物 (S = 1/3, 1/4, 1/6)

26号横穴墓（第34図）

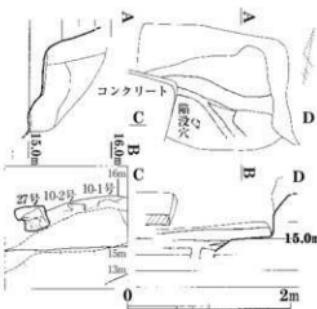
25号横穴墓の南東9m、標高12.4mの位置で横穴墓の墓道の一部を検出した。設定したトレントチが狭小だったこともあり、検出した墓道は土層図に現れている通り、東側の岩盤の立ち上がりだけである。掘り下げ面で長さ30cmを測り、トレントチ外にS-47°-W方向に伸展する。トレントチを南西側に更に拡幅することで、詳細が窺えよう。検出した範囲では、岩盤の剥落が目立った。出土遺物はない。



第34図 26号横穴墓実測図 ($S = 1/60$)

27号横穴墓（第35図、図版12）

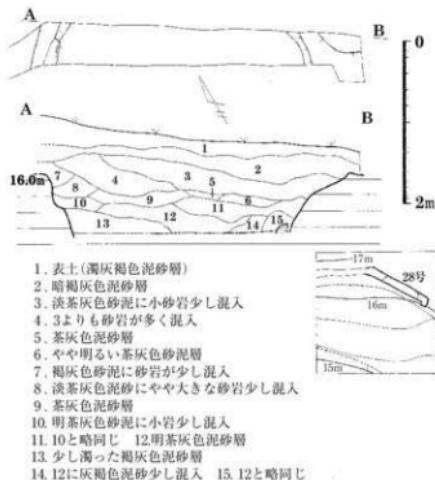
調査区の西部、10-2号墓の西2mの位置で、上部の岩盤を削り出して造成した平坦面の一部を検出した。平坦面はトレントチの北から東側にかけて2段造られ、上下で14cmの段差をもつ。平坦面の東側は、下段の平坦面が10-2号墓の墓道に、西側は丘陵の形状に沿って西に伸展すると考えられる。このトレントチの南西側には、墓石の台座として使われたコンクリート製の石材が丘陵上部より転落しており、重量も重いことから取り除くことが出来なかった。この石材の東側は掘り下げ可能な埋土であるが、埋土の掘り下げ途中で10cm×14cm大の陥没穴が開口した。陥没穴が小さいこともあり、内部の観察は十分に行えなかったが、検出した平坦面の状況を考えても、この下部に墓室がある可能性は高い。トレントチ内から遺物は出土していない。



第35図 27号横穴墓実測図 ($S = 1/60$)

28号横穴墓（第36図、図版12）

調査区の西側、10-1号横穴墓の東4.5mから丘陵の傾斜変換点に沿って東に長くトレントチを設定し、その東半部でS-28°-Wに伸展する墓道の一部を検出した。検出した墓道は西側が一部二段掘りの形状となるものの、墓道底部に向か内傾して掘り下げられたと考えられる。墓道の幅は、検出面の上端部で3.46m、掘り下げ面で2.66mを測り、他の調査区で検出した墓道に比べて規模が大きい。脇墓室等から伸びる墓道とは考えられず、主墓室に伴う主墓道と考えられる。遺物はトレントチの西半部から須恵器が1点出土したほか、東半部から東端にかけて須恵器や土師器の破片が若干出土した。



第36図 28号横穴墓実測図 ($S = 1/60$)

出土遺物（第33図137・138）

137、138ともに須恵器である。137は小型の壺の破片と考えられる。球状の胸部から太い基部にいたり、内面回転ナデ仕上げ、外面は基部から下位にカキメを施す。138は壺や平瓶等の破片で、外面にカキメを施す。137がトレンチ西半部、138がトレンチの東端で出土した。

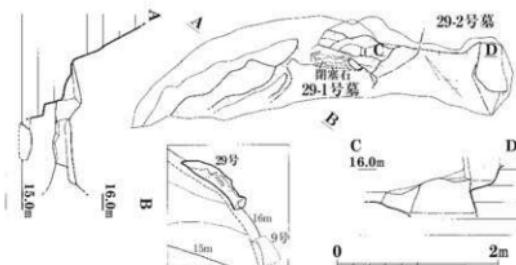
横穴墓の使用時期の指標となる遺物はないため、詳細は不詳である。

29号横穴墓（第37図、図版12・13）

28号横穴墓の墓道と9号横穴墓の間の標高16mに設定したトレンチで、2基の横穴墓と墓道の一部を検出した。トレンチ中央の墓室を29-1号墓、トレンチ東端の墓室を29-2号墓とする。両横穴墓は近接した位置に築かれ、不詳な点は残るもの、墓室の開口方向や墓道の取りつき方を考慮して、同一の単位群を構成すると判断した。

29-1号墓はトレンチ西部に伸展する墓道の検出時に発見した横穴墓で、羨門を硬質砂岩の偏平石で閉塞している状況を確認した。掘り下げ面で閉塞石は2石あり、 $56\text{cm} \times 16\text{cm}$ 大で厚さ16cm

の石材の上に、 $20\text{cm} \times 10\text{cm}$ 大の小さめの石を積み重ねている。閉塞石の墓室側への土砂の流入は少なく、閉塞石前の埋土を掘り下げると閉塞石が倒壊する恐れがあったため、途中で掘り下げを中止した。そのため、墓室の状況については不詳な点が残るが、閉塞石の隙間から僅かに観察できたところでは、玄室の平面形は長方形を呈し、



第37図 29号横穴墓実測図 ($S = 1/60$)

断面形は天井部にかけてドーム形となる。床面の壁際に排水溝が巡るかは不明。玄室右側壁の奥側の岩盤が床面から天井の高さの中ほどで一部開口し、東の29-2号墓の玄室に続いている状況が確認できた。上部の岩盤を削りだした狭小な平坦面は西に伸展することから、掘り下げ面で僅かに確認できた閉塞石前の墓道はS-75°-W方向に伸展すると考えられる。閉塞石上部の埋土掘り下げ時に須恵器の甕片が1点出土した。

29-2号墓はS-58°-Wに開口する横穴墓で、調査前に一部墓室が開口していた。墓室の内化は行っていないが、玄室の平面形は方形を呈し、主軸長1.7mを測る。玄室の幅や現床面からの高さは未計測で、床面に排水溝が巡るかも不詳である。29-1号墓で少し触れたが、玄室左側壁の入口側は、現床面の高さで29-1号墓の玄室へと開口する。玄室内は一部天井が崩落しているが、壁面は内傾気味に直立した後、削り出した軒先線からドーム形の天井部となる。墓道は南側で長さ70cm、入口側で幅72cmを測り、略同じ幅で墓室の内外に伸展する。羨門は岩盤が崩落しているため、篠縁があったかは不詳であるが、掘り下げ面で幅80cm、高さ40cmを測る。墓道は羨道からハ字状に広がり、西側は29-1号墓の墓道へ、南側は9号横穴墓の方向へ伸展する。墓道の埋土は途中で掘り下げを止めているが、29-1号墓と29-2号墓の墓室の築かれた高さと、29-1号墓の閉塞石を検出した高さを考えると、29-1号墓の墓道より高い位置に墓道が掘り込まれたと考えられる。29-1号墓との先後関係については不明である。遺物は出土していない。

出土遺物（第33図139）

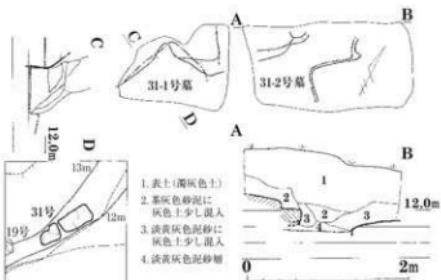
瓶類に貼り付けた円盤部の破片で、内面には指頭圧痕が明瞭に残る。外面はカキメ後不定方向ナデを施し、指頭圧痕が残る。

時期の指標となる遺物はないため、詳細は不明である。

31号横穴墓（第38図、図版13）

調査区の南東側、19-2号横穴墓の東2m、標高12mの位置で隣接した2基の横穴墓の墓室の一部を検出した。墓室は天井部の大半が削平のため消滅しており、玄室壁面の基底付近を確認したのみであるため不詳な点が多いが、両墓室を同一の単位群と捉え、西側の墓室を31-1号墓、東側の墓室を31-2号墓とする。

31-1号墓は玄室の奥壁と右側壁を検出しており、右側壁は途中で消失している。奥壁は掘り下げ面で幅82cmを測り、トレンチ外へと更に伸展する。右側壁は長さ62cmまで遺存する。玄室の平面形は方形か長方形になろう。玄室の壁面は奥壁側のみ確認できたが、直立気味に内傾して立ち上がり、掘り下げ面から高さ26cmまで遺存する。壁面の立ち上がり方から判断



第38図 31号横穴墓実測図 (S = 1/60)

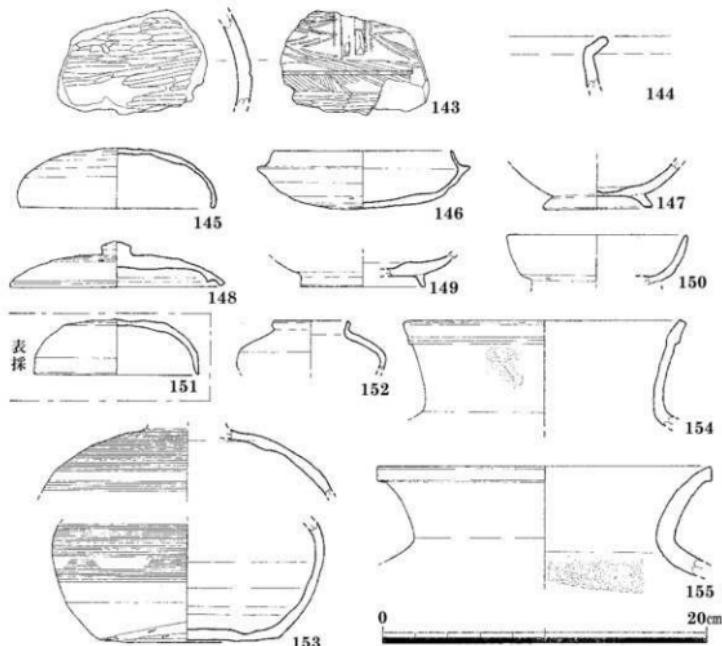
すると、遺存部より上方に軒先線を削り出し、そこからドーム形の天井部を形成していたのだろう。玄室壁面の遺存状況から、墓室は S - 66° - E に開口していたと考えられる。

31 - 2 号墓は西半部のトレンチ内で玄室の左側壁、東半部のトレンチ内で右側壁と羨道の一部を検出した。31 - 1 号墓の玄室の遺存状況を考えると、31 - 2 号墓の玄室左側壁と羨道は消失している可能性が高い。玄室の平面形は方形か長方形になると思われ、検出部位で幅 1.6 m、東側で長さ 46cm を測る。天井部の形状は不明。トレンチ東半部の北西には、崩落した玄室天井の一部が残る。羨道は東側で現存長 44cm を測り、遺存する壁面の方向から、S - 29° - E に開口していたと考えられる。幅や高さ等は不明である。どちらの墓室に伴うか不明だが、埋土内から須恵器の破片が出土した。

出土遺物（第 33 図 140 ~ 142）

140, 142 は甕、141 は器壁の厚さから壺の破片であろう。ともに胴部下半の破片で、内面に同心円の当て具痕、外面に平行叩き目が残る。内面に残る当て具の幅は、142 が広く深い。141 は胴下半の破片で、内面は同心円状の当て具痕を回転ナデによりほぼ完全にナデ消している。

横穴墓の使用時期を窺うる遺物はないため、両墓室とも時期は不詳である。

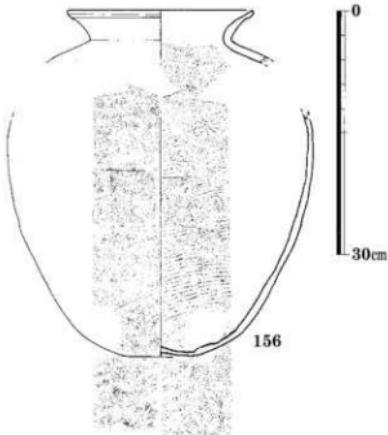


第 39 図 表採遺物および過去調査時出土遺物 (S = 1/3)

表採資料および過去調査時出土資料（第39・40図、図版16）

表採品のうち、今回の調査対象とした横穴墓の付近で採集したものは既に述べたので、前回の調査対象とした丘陵東側斜面の表採資料を紹介する。151は15～17号墓付近で表採した完形の須恵器の壺蓋である。天井から口縁部にかけて丸味のある器形で、天井部外面はヘラ切り後難なナデ仕上げ。

151を除き、他は昭和42年の分布調査時に採集されたものである。当時の調査記録によると、各横穴墓の発見時に一部発掘を行ったようだが、各遺物の出土地点等の詳細は不明である。143、144は弥生土器である。143は壺の胴部片で、刷け目の上位に貝殻腹縁で鋸歯文を施し、二条の三角突帯で文様を区画する。外面の刷け目下と内面はヘラミガキ。144はく字状口縁の壺片で、口縁部は内外面ヨコナデ。この2点を除き、他はいずれも須恵器である。145と146は壺蓋で、145の天井部と146の底部外面はヘラ切り後ナデ仕上げ。器形の特徴や焼成の程度から考えて、恐らく対になるものだろう。147は高台付きの壺の底部片で、底部端に貼り付けた高台は外に踏ん張り、端部下面は平坦面をなす。148は天井部に宝珠形のつまみの付く壺蓋で、天井部と体部の境に稜がつき、身受けのかえりは口唇部より内側に収まる。149は赤焼きの須恵器の高台付き壺身で、やや高さのある高台の内外面はヨコナデ、他はナデ仕上げである。150は壺身片で、器形はやや浅めで体部は下位で屈曲する。高台を欠く。152は小型の短頸壺で、胴部の屈曲が強い。内外面とも調整は回転ナデ。153は平瓶か長頸壺の頸基部から胴部上位、胴部中位から底部にかけての破片である。同一個体のものだが接合しなかった。胴部外面は頸基部から中ほどにかけてカキメ、底部との境に静止ヘラケズリを施し、底部はヘラ切り後不定方向ナデ仕上げ。154～156は壺である。154の口頸部は直立気味に外傾し、口唇部を肥厚させて断面台形状の端部となる。頸部にヘラ記号が入る。155の口頸部は強く外湾し、端部は平滑に仕上げる。156は口頸部と胴部上位から底部にかけての破片で同一個体のものである。口頸部は強く外湾し、口唇部外面に低い三角突帯が巡る。胴部最大径は肩部にあり、倒卵状の器形で平底気味の底部となる。頸基部から胴部下位までの内面には車輪文の当て具痕が明瞭に残り、底部にかけては平行当て具痕で車輪文を消している。外面には格子目叩き目が残り、底部付近は叩き目を一部ナデ消す。

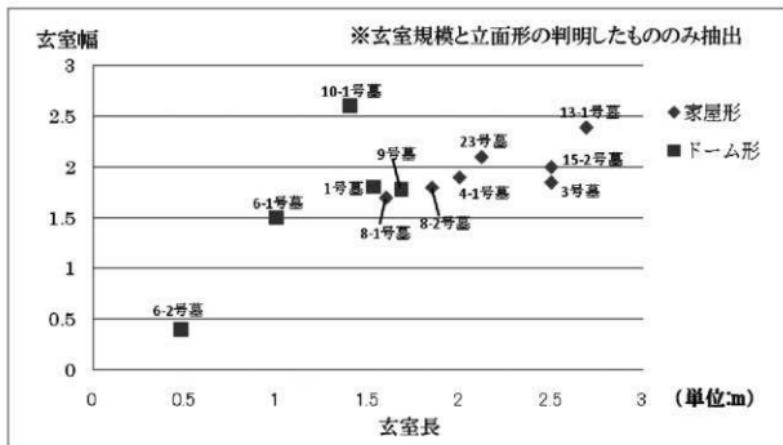


第40図 過去調査時出土遺物② (S = 1/6)

IV. おわりに

遺跡詳細分布調査に伴う確認調査の結果、固結堆積岩が露出する舌状丘陵の南側斜面から東側斜面にかけて総数31基の横穴墓が所在することが明らかとなった。ただし、今回の調査が土木工事等に伴う発掘調査ではなく、最小限の遺跡の破壊にとどめたトレンチ調査であったため、鬼津横穴墓群の全容を窺うる資料として十分なものとは言い難い。しかし、古くに丘陵南側斜面で所在が確認されていた1~10号横穴墓については、各横穴墓が丘陵上にどのような位置関係で築かれたかを知る事ができ、また今回の調査の結果、更に横穴墓の基数が増えることは確実となった。前回の報文中でも指摘されているが、各横穴墓の造墓に当たっては、墓室が狭小な範囲で上下・左右に隣接した位置に築かれた状況が窺える。今回の調査で確認された24基の横穴墓については、既に番号が設定されたものについては継承して使用しているため、墓道を共有する同一の単位群と考えられるものでも異なる番号が付されている。各横穴墓の墓室から墓道までの様相が明らかになった時点での再整理する必要がある。

今回の調査の目的や期間の制約上、自然崩壊調査の対象としたもの以外、墓室の床面の掘り下げや固化は行っていない。しかし、鬼津横穴墓群でこれまで行われた調査の結果、以下の事が明らかとなった。各横穴墓はいずれも单室構造で、玄室の平面形がわかるものでは方形か縦長方形のものが多数を占め、横長方形や巾着形のものが少数見られる。立面形では、壁面に軒先線を削り出した家屋形と床面から天井部にかけてドーム形となる2種類があり、玄室規模の大きなものが前者を採用する傾向が受けられる。各横穴墓からの出土遺物では、現段階で6世紀中頃に遡る資料は得られておらず、概ね6世紀後半頃に造墓が始まり、早いものでは7世紀前半に使用を終えつつも、いくつかの横穴墓では7世紀後半頃まで追葬が行われている。



第41図 各横穴墓の玄室規模と立面形の相関関係

これまでの調査で横穴墓の単位群の造墓の契機となった主墓室の左右に脇墓室が造られた状況が確認できているが、主墓道と各墓室との取りつき方の全容が明らかとなっていない現状では、何基の横穴墓で単位群が個性されたかを判断する事はできないため、その解明が今後の課題の1つとなるだろう。また、今回の調査で13号横穴墓と19-1号墓で鉄滓が出土した事が注目できる。当遺跡付近で同時期頃に営まれた集落は未だ未調査のため詳細がわからないが、西約18kmには古墳時代後期を主体に製鉄が行われた尾崎・天神遺跡や金丸遺跡等の集落が営まれており、各遺跡間の関係性については速断できないが、当横穴墓群の被葬者の出自や性格を考える際の一資料となろう。横穴墓を築いた集団の出自や被葬者の性格について問題となるのは、鬼津横穴墓群の東300mに所在する鳥見山古墳・横穴墓群についてもいえる事である。この遺跡は芦屋丘陵の東端にあり、細長く伸びた丘陵南部の東西斜面に35基の横穴墓が、丘陵頂部の平坦面には5基の古墳が築かれている。同一丘陵の北には古墳時代の散布地として上ノ段遺跡があるが、未調査のため遺跡の詳細はわからっていない。鬼津横穴墓群と鳥見山横穴墓群の位置関係を考えると、丘陵上の固結堆積岩の露出地帯に密集して相当数の横穴墓が築かれており、町域内での古遠賀湯の進出状況を考えても、両遺跡付近の丘陵上に対応する集落が営まれている可能性が高い。芦屋丘陵上の遺跡でも町域の西端に位置する遺跡と、鬼津横穴墓群付近の遺跡では調査による記録の量に開きがあり、当時の歴史を復元する際の判断材料に乏しい状況である。しかし、周辺に所在する集落遺跡との関係性が明らかになれば、鬼津横穴墓群や鳥見山古墳・横穴墓群に対する評価もより明確なものとなるだろう。

埋蔵文化財は土地に刻まれた人類の生活の痕跡であり、そこから得られる様々な情報をひも解くことで当時の歴史を解明する際の客観的な資料となりうるが、一度失われてしまうと二度と取り戻すことができないという特徴をもっている。この貴重な財産をできるだけ後世に残していくことは、今を生きる我々に課された責務である。今回自然崩壊本調査の対象とした横穴墓は、後世の人々による地形の改変や経年による影響を受けて消滅の危機に瀕していたもので、部分的ではあるが本調査を行ったことで消滅前に最低限の記録を残すことができた。しかし、解明すべき問題は多くあり、今回の調査の結果得られた成果は微々たるものといえよう。

末筆となりましたが、今回の調査にご協力をいただいた土地所有者の方々、現地調査及び整理作業に従事していただきました多くの方々に感謝の言葉を申し上げまして、本報告書の結語に代えさせていただきます。

出土土器観察表① ①口径、②器高、③口張高、④底径、⑤縁部径、⑥鋸部最大径、⑦受け部径、⑧立ち上がり高さ、⑨高台高、⑩脚部高、⑪体部高

| 件名番号 | 出土遺構 | 器種(部位) | 各部計測値 | 施土 | 色調 | | 焼成 |
|---------------------|-------------------|----------------------|----------------------------------------|-----------------------------------------------------|-----------|-----------|-------|
| | | | | | 内面 | 外面 | |
| 第5201 | 1号横穴墓 | 土器部：坪 | ①12.2、②4.3 | 無い：～3.1mmの大長石を多く、～3.3mmの大石英を少量化。～2mmの大粒の褐色色の粒を多く含む。 | 淡褐色～明褐色 | 淡褐色～明褐色 | 良 |
| 第5202 | 1号横穴墓 | 土器部：坪 | ①(12.1)、 ②4.7 | 粗い：～3.5mmの大長石を多く、～2.5mmの大石英をやや多く、～2mmの大粒の白雲母を若干含む。 | 淡褐色～明褐色 | 淡褐色～明褐色 | 良 |
| 第5203 | 1号横穴墓 | 青白磁：碗 | ②(4.2) | 精良：細砂粒を若干含む | 淡綠黃色～濃綠黃色 | 淡綠黃色 | 良 |
| 第5204 | 1号横穴墓 | 須恵器：甕 (口縁部) | ①4.0、 ②(5.95) | 粗い：～1.3mmの大長石を多く、～1mmの大石英を若干含む | 暗青灰色～淡青灰色 | 暗黑灰～暗褐色 | 良 |
| 第5205 | 1号横穴墓 | 須恵器：甕 (口縁部) | ③(3.1)、②(3.7) | やや粗い：～1.5mmの大長石をやや多く含む | 暗黒灰～暗灰 | 淡綠黃色 | 良 |
| 第5206 | 1号横穴墓 | 須恵器：長頸瓶 (底部) | ④(9.5)、 ⑤(2.8) | 粗い：～2.3mmの大長石を多く、～2.9mmの大石英を少量化 | 暗青灰色 | 黑褐色～暗黑反色 | 良 |
| 第6207 | 1号横穴墓、 19号横穴墓 | 須恵器：甕 (口縁～胸部) | ①(18.2)、 ②(8.5)、③(3.2) ⑤(15.0) | やや粗い：～1.3mmの大長石を多く含む | 淡灰～暗青灰色 | 暗青灰色～暗灰黑色 | ややあまい |
| 第6208 | | | ②(15.9)、 ⑥(29.2) | | | | |
| 第6209 | 1号横穴墓 | 須恵器：甕 (口縁～付近) | ①(19.3)、 ②(9.15)、③(3.3) ⑥(16.25) | 良：～3mmの大長石を少量化。～3mmの大石英を若干含む | 暗青灰色 | 暗青灰色 | 良 |
| 第6210 | 1号横穴墓 | 須恵器：甕 (口縁部) | ①(26.5)、 ②(6.25) | 良：～2mmの大長石を少量化 | 暗青灰色 | 暗黄灰色～黑褐色 | あまい |
| 第6211、14、 11号横穴墓 | 須恵器：甕 (腹部～肩部) | ②(20.65)、 ⑤(18.7) | 粗い：～4mmの大長石を非常に多く、～2mmの大石英を少量化 | 暗青灰色 | 暗青灰色 | ややあまい | |
| 第6212 | 1号横穴墓 | 須恵器：甕 | ②(4.95) | やや粗い：～1.8mmの大長石をやや多く、～2.4mmの大石英を若干含む | 暗灰黑色 | 黃灰～黑褐色 | 良 |
| 第6213 | 1号横穴墓 | 須恵器：甕 | ②(6.85) | 良：～1mmの大長石・石英を若干含む | 暗灰黑色 | 暗灰黑色 | 良 |
| 第6215 | 1号横穴墓 | 須恵器：甕 | ②(8.0) | 粗い：～1mmの大長石を多く含む | 暗灰黑色 | 暗綠褐色～淡灰黑色 | 良 |
| 第6216 | 1号横穴墓表採 | 須恵器：甕 | ②(7.3) | 良：～2.8mmの大長石を少量化。～1mmの大石英を若干含む | 暗灰黑色～淡青灰色 | 暗青灰色 | 良 |
| 第6217 | 1号横穴墓 | 須恵器：甕 | ②(7.2) | 粗い：～2mmの大長石を多く、～1.2mmの大石英を若干含む | 暗青灰色 | 暗青灰色 | 良 |
| 第6218 | 1号横穴墓 | 須恵器：甕 | ②(7.4) | やや粗い：～2.5mmの大長石をやや多く、～1.5mmの大石英を若干含む | 暗灰黑色 | 暗青灰色～淡灰黑色 | ややあまい |
| 第6219 | 1号横穴墓 | 須恵器：甕 (腹部～肩部) | ②(8.3) | 良：～1mmの大長石を少量化。～2.5mmの大石英を若干含む | 暗灰黑色～淡青灰色 | 暗青灰色～黑褐色 | 良 |
| 第6220 | 1号横穴墓 | 須恵器：甕 | ②(14.8) | 粗い：～2.6mmの大長石を多く、～2mmの大石英を少量化 | 暗青灰色～淡青灰色 | 暗青灰色～灰白色 | ややあまい |
| 第10回21 | 6号横穴墓付近 表採 | 須恵器：坪身 附付基盤 | ①(8.2)、②(2.0) ②(10.0)、 ④(0.45) | 良：長石の粒を若干、～1.2mmの大石英を若干含む | 淡灰～暗灰黑色 | 暗青灰色～黑褐色 | 良 |
| 第10回22 | 6号横穴墓付近 表採 | 須恵器：坪身 附付基盤 | ②(2.8) | 良：～1mmの大長石を少量化。～1mmの大石英を若干含む | 暗灰～黃褐色 | 暗灰黃褐色 | ややあまい |
| 第10回23 | 6号横穴墓付近 表採 | 須恵器：甕 (腹部基部) | ②(4.5) | やや粗い：～1mmの大長石をやや多く、～2.7mmの大石英を少量化 | 暗青褐色～淡褐色 | 暗青褐色 | 良 |
| 第10回24 | 6号横穴墓付近 表採 | 須恵器：甕 | ②(4.7) | 良：～1mmの大長石を少量化 | 黃白色 | 黃白色 | あまい |
| 第10回25 | 6号横穴墓付近 表採 | 須恵器：甕 (腹部) | ②(11.0) | 粗い：～1mmの大長石を多く、～1.6mmの大石英を若干含む | 暗灰黑色 | 暗青黑色～淡青灰色 | 良 |
| 第10回26 | 6号横穴墓付近 表採 | 須恵器：甕 (底部付近) | ②(13.5) | やや粗い：～1.3mmの大長石をやや多く、～1.5mmの大石英を若干含む | 暗灰褐色 | 暗青反色～淡青灰色 | 良 |
| 第10回27 | 6号横穴墓付近 表採 | 須恵器：甕 (底部付近) | ②(6.95) | 良：長石の粒を若干含む | 暗青灰色 | 暗青黑色～暗灰黑色 | 良 |
| 第10回28 | 6号横穴墓付近 表採 | 須恵器：甕 (底部付近) | ②(11.35) | 良：～3.3mmの大長石を若干、長石の粒をやや多く含む | 暗青灰色 | 暗灰黑色～暗青黑色 | 良 |
| 第10回29 | 6号横穴墓付近 表採 | 須恵器：甕 (底部付近) | ②(8.8) | やや粗い：～1.3mmの大長石を多く、石英の粒を若干含む | 暗青褐色 | 暗黑褐色 | 良 |
| 第12回30 | 30号横穴墓 | 須恵器：甕 (腹部) | ②(7.0) | やや粗い：～2mmの大長石をやや多く含む | 暗黃褐色～黑褐色 | 暗黑褐色 | 良 |
| 第12回31 | 8号横穴墓 | 須恵器：甕 | ②(3.1) | やや粗い：～2.4mmの大長石をやや多く含む | 暗灰褐色 | 淡灰黑色 | 良 |
| 第12回32 | 30号横穴墓 | 須恵器：甕 | ②(8.3) | 粗い：～2mmの大長石を多く、～1mmの大石英を若干含む | 青灰色 | 青灰色 | 良 |
| 第12回33 | 30号横穴墓 | 須恵器：甕 | ②(7.1) | やや粗い：～2mmの大長石を多く含む | 暗灰褐色～青灰色 | 暗黑褐色 | 良 |
| 第12回34 | 30号横穴墓 | 須恵器：甕 | ②(6.8) | 良：～1.5mmの大長石を少量化。石英の粒を若干含む | 暗灰褐色～黃褐色 | 暗灰褐色 | 良 |
| 第12回35 | 22号横穴墓 | 須恵器：坪蓋 | ②(2.9) | やや粗い：～1mmの大長石をやや多く、～2.8mmの大石英を若干含む | 暗青灰色 | 黑褐色 | 良 |
| 第12回36 | 22号横穴墓 | 須恵器：甕 (口縁部) | ②(2.1) | 良：～1mmの大長石を少量化。～1mmの大石英を若干含む | 暗青褐色 | 淡青灰色 | 良 |
| 第12回37 | 13号横穴墓主基盤 道8番 | 須恵器：甕 (口縁部) | ②(14.9) | やや粗い：～1mmの大長石・石英を多く含む | 暗灰黑色 | 暗青褐色～黑褐色 | 良 |
| 第12回38 | 13号基壇埋設 土内 | 須恵器：甕 (底盤片) | ②(6.5) | 粗い：～1mmの大長石を多く含む | 暗黑褐色～黑褐色 | 暗黑褐色 | 良 |
| 第12回39 | 13号横穴墓主基盤 道10番 | 須恵器：甕 (底盤付近) | ②(2.85) | 粗い：～4mmの大長石を多く、～2.5mmの大石英を多く含む | 淡灰黑色 | 暗青灰色 | 良 |
| 第12回40 | 13号横穴墓主基盤 道11番 | 須恵器：甕 | ②(14.9) | やや粗い：～1mmの大長石を多く含む。4mmの大長石を若干含む。1mmの大石英を若干含む | 淡青褐色～淡灰黑色 | 暗青灰色 | 良 |
| 第12回41 | 13号横穴墓主基盤 道11番 | 須恵器：甕 | ②(7.4) | やや粗い：～1.3mmの大長石を多く含む | 暗灰褐色 | 暗青灰色 | 良 |
| 第12回42 | 13号基盤 底7層最下面 | 須恵器：甕 | ②(20.0) | 良：～3.3mmの大長石を少量化。～1.5mmの大石英を若干含む | 暗青褐色 | 暗綠褐色 | 良 |

出土土器観察表② ①口径、②器高、③口頭高、④底径、⑤頭部径、⑥側部最大径、⑦受け部径、⑧立ち上がり高さ、⑨高台高、⑩脚部高、⑪体部高

| 辨団番号 | 出土遺構 | 器種(部位) | 各部計測値 | 地土 | 色調 | | 焼成 |
|--------|-----------------------------------|-------------------------|-----------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------|-----------------------------|-----------------------------|-------|
| | | | | | 内面 | 外面 | |
| 第19回43 | 13-1号墓玄室内 | 土器類：杯 | ①(10.3) ②(3.05) | 良：～1.5mm大の長石を少量、石英の細粒を若干含む | 緑赤橙色 | 緑赤橙色 | 良 |
| 第19回44 | 13号核穴墓主墓道、13-1号墓埋設 洞室玄室内 | 須恵器： 瓶(縦部・肩部) | ①(14.3) ②(2.6) | 良：～7mm大の長石を少量、石英の細粒を若干含む | 緑灰黒色 | 緑黒褐色 | 良 |
| 第19回45 | 13号核穴墓主墓道、13-1号墓埋設 洞室玄室内 | 土器類：壺 | ②(3.6) | 粗い：～2.5mm大の長石が多く、～2mm大の石英が多く、～2.5mm大の緑灰黒色粒を若干含む | 赤橙色 | 赤橙色 | 良 |
| 第19回46 | 13号核穴墓主墓道、13-1号墓埋設 洞室玄室内 | 土器類：壺 | ②(5.2) | やや粗い：～2mm大の長石・石英を多く、～1.5mm大の緑灰黒色粒を若干含む | 赤橙色 | 赤橙色 | 良 |
| 第19回47 | 13号核穴墓主墓道、11層 | 須恵器：杯(縦部・肩部) (口縁・肩部) | ①(10.8) ②(4.25) | 良：～2mm大の長石を少量、～2mm大の石英を若干含む | 緑赤褐色 | 緑褐色 | あまい |
| 第19回48 | 13号核穴墓主墓道 | 須恵器：杯身 | ①(7.6) ②(2.55) ③(0.45) | 粗い：～1.5mm大の長石を多く、～2mm大の石英を少量含む | 緑灰黒色 | 緑黒褐色 | 良 |
| 第19回49 | 13号核穴墓主墓道10層 | 須恵器：杯身 | ①(9.8) ②(11.2)⑩(9.0) ③(3.3) | やや粗い：～3mm大の長石を多く含む | 緑紫褐色 | 緑灰黒色～ 緑灰黒色 | ややあまい |
| 第19回50 | 13号核穴墓主墓道2層 | 須恵器： 瓶(縦部・肩部) | ②(2.1) ③(10.1) | 良：～1.5mm大の長石を少量、石英の細粒を少量含む | 淡黄赤色～ 緑黒褐色 | 淡灰褐色 | 良 |
| 第19回51 | 13-1号墓玄室内 | 須恵器：平瓶 | ①(4.7)②(10.15) ③(2.9)④(3.5) ⑤(3.55)⑥(12.2) | やや粗い：～3mm大の長石を多く含む、～1mm大の石英を若干含む | 青灰色 | 青灰褐色～ 青黑色 | 良 |
| 第19回52 | 13-1号墓玄室内 | 須恵器：平瓶 | ①(7.1)②(14.5) ③(4.2)④(5.9) ⑤(5.9)⑥(15.9) | 非常に粗い：～2mm大の長石非常に多く含む、～2mm大の石英を少量含む | 緑黒灰色 | 緑黒褐色～ 緑黒色 | 良 |
| 第19回53 | 13号核穴墓主墓道8、10、11層 | 須恵器： 瓶(縦部・肩部) | ①(11.9) ②(15.9)③(11.5) ④(11.8) | 粗い：～2mm大の長石非常に多く含む、1mm大の石英少量含む | 緑黒灰色 | 緑灰黒色～ 緑灰黒褐色 | 良 |
| 第19回54 | 13号核穴墓主墓道8、10層、 13-1号墓玄室内 | 須恵器： 瓶(縦部・肩部) | ①(12.8) ②(15.0) ③(10.4)④(10.4) | やや粗い：～1mm大の長石を多く含む、3mm大の長石を若干含む 良：～1mm大の石英を若干含む | 緑葉灰色 | 緑黒褐色～ 青灰褐色 | 良 |
| 第19回55 | 13号核穴墓主墓道2、7～9層 | 須恵器：脚付甕 | ①(8.2)②(19.7) ③(4.1)④(12.2) ⑤(6.0)⑥(14.4) ⑦(9.5)⑧(2.2) | 粗：～1mm大の長石・石英少量含む | 黒灰色～ 黒灰色 | 青灰褐色～ 青灰褐色 | 良 |
| 第19回56 | 13号核穴墓主墓道8、10層 | 須恵器：平瓶(口縁部) | ①(9.4)②(4.0) | 非常に粗い：～2mm大の長石を非常に多く含む、～2mm大の石英を多く含む | 緑葉褐色 | 緑葉褐色 | ややあまい |
| 第19回57 | 13号核穴墓主墓道8層 | 須恵器：長颈甕 | ①(7.8)②(15.2) ③(5.5)④(4.5) ⑤(4.8)⑥(14.9) | 粗い：～1mm大の長石非常に多い、0.3～1mm大の舟石を少、～0.25mm大の石英若干含む | 緑黒褐色～ 緑黒色 | 青灰褐色～ 青灰褐色 | 良 |
| 第19回58 | 13号核穴墓主墓道8層 | 須恵器：長颈甕 | ①(18.2)②(4.9) ③(5.2)④(17.0) ⑤(3.1)⑥(10.0) | 非常に粗い：～3.5mm大の長石を非常に多く含む | 緑黒褐色～ 緑黒色 | 青灰褐色～ 青灰褐色 | 良 |
| 第20回59 | 13号核穴墓主墓道2、6、8、9層 | 須恵器：瓶(縦部) | ①(7.8)②(21.3) ③(4.85)④(4.9) ⑤(4.5)⑥(4.7) ⑦(6.4)⑧(12.3) | やや粗い：1mm大の長石の細粒を多く含む、～3mm大の石英を若干含む | 淡黄灰褐色～ (縦部)暗黄褐色～ 暗黄褐色 | 淡黄灰褐色～ (縦部)暗黄褐色～ 暗黄褐色 | ややあまい |
| 第20回60 | 13号核穴墓主墓道8～10層 | 須恵器：平瓶(縦基部～底部附近) | ①(7.13) ②(12.4) ③(9.19) | 非常に粗い：～4mm大の長石を非常に多く、～2mm大の石英を少含む | 黒褐色～ 緑葉褐色 | 緑灰褐色～ 黒褐色 | 良 |
| 第20回61 | 13-1号墓 門柱(底部附近) | 須恵器：平瓶 | ①(6.0) ②(14.2) | 良：～1mm大の長石を多く含む | 緑赤褐色 | 緑赤褐色 | ややあまい |
| 第20回62 | 13号核穴墓主墓道10層 (脚部) | 須恵器：壺(縦部) | ①(10.3) ②(22.6) | やや粗い：～2mm大の長石を多く、石英の細粒を若干含む | 暗青灰色 | 暗青灰色 | 良 |
| 第20回63 | 13号核穴墓主墓道11層、13-1号墓(底部)5～6層 | 須恵器：壺(縦部・脚部) | ①(13.4) | 非常に粗い：～2mm大の長石を多く、～2.8mm大の石英を若干含む | 緑葉灰色 | 暗青灰色～ 暗灰褐色 | 良 |
| 第20回64 | 13-1号墓玄室内 | 須恵器：壺 | ①(12.8)②(17.2) ③(2.85)④(17.15) | 粗い：～2mm大の長石非常に多く含む、～1mm大の石英若干含む | 暗青灰色～ 暗青灰色 | 暗青灰色～ 暗青灰色 | ややあまい |
| 第20回65 | 13号核穴墓主墓道8層 | 須恵器：壺(口縁部、脚部) (底部) | ①(11.4) ②(17.7) ③(3.0)④(5.7)⑤(18.35) | やや粗い：～4.5mm大の長石をやや多く、～3.8mm大の石英を少含む | 淡灰黃褐色～ 暗黒褐色 | 淡灰黃褐色～ 暗黒褐色 | 良 |
| 第21回66 | 13号核穴墓主墓道10層 | 須恵器：壺 | ①(13.6) ②(6.2) | 粗い：～2.3mm大の長石を多く、～1.5mm大の石英を若干含む | 暗黒褐色～ 暗黒褐色 | 暗黒褐色～ 暗黒褐色 | ややあまい |
| 第21回67 | 13-1号墓埋設 洞室玄室内 | 土器類：壺 | ②(7.8) | やや粗い：～2mm大の長石をやや多く、～2mm大の石英を若干含む | 赤橙色 | 赤橙色 | 良 |
| 第21回68 | 19号核穴墓 | 須恵器：壺(脚部・肩部) | ②(9.0) | やや粗い：～1.8mm大の長石をやや多く、～1.9mm大の緑葉褐色 ガラス質粒を若干含む | 暗灰褐色～ 暗褐色 | 暗灰褐色～ 暗褐色 | 良 |
| 第21回69 | 13号核穴墓主墓道2、8層 | 須恵器：壺 | ②(8.2) | 良：～1mm大の長石をやや多く含む | 暗青灰色～ 暗青灰色 | 暗青灰色～ 暗青灰色 | 良 |
| 第21回70 | 13号核穴墓主墓道7、10層 | 須恵器：壺 | ②(5.8) | やや粗い：～2.8mm大の長石をやや多く、石英の細粒を若干含む | 緑葉灰色 | 暗黒褐色 | 良 |
| 第21回71 | 13-1号墓 門柱5～6層 | 須恵器：壺(か) | ②(6.0) | 良：長石の細粒をやや多く、～1mm大の石英を若干含む | 緑葉褐色 | 緑葉褐色 | 良 |
| 第21回72 | 21号核穴墓 | 須恵器：壺 | ②(9.2) | 黒灰色 | 緑灰色～ 黒灰色 | 緑灰色～ 黒灰色 | 良 |
| 第21回73 | 21号核穴墓 | 須恵器：壺 | ②(11.0) | やや粗い：3.5mm大の長石を少、長石の細粒をやや多く、～2mm大の石英を若干含む | 緑灰黒色 | 緑青灰褐色 | 良 |
| 第21回74 | 21号核穴墓 | 須恵器：壺 | ②(9.7) | 黒灰色 | 緑黒灰色 | 緑黒灰色 | 良 |
| 第21回75 | 13号核穴墓主墓道8～10層 | 須恵器：壺(底部附近) | ②(34.75) | やや粗い：～2.6mm大の長石を多く、～1.5mm大の石英を若干含む | 淡青灰色 | 黒褐色～ 青灰色 | 良 |
| 第21回76 | 13号核穴墓主墓道8～11層、 13-1号墓埋設(底部附近) | 須恵器：壺 | ②(42.0) | 粗い：～5mm大の長石を多く、～3.2mm大の石英を少含む | 淡青灰色 | 黒褐色～ 青灰色 | 良 |

出土土器観察表③ ①口径、②器高、③口張高、④底径、⑤頸部径、⑥胴部最大径、⑦受け部径、⑧立ち上がり高さ、⑨高台高、⑩脚部高、⑪体部高

| 件因番号 | 出土遺構 | 器種(部位) | 各部計測値 | 胎土 | 色調 | | 焼成 |
|---------|------------------------------------|-------------------------|----------------------------------------------------|-------------------------------------------------------|---------------|---------------|-------|
| | | | | | 内面 | 外面 | |
| 第22回77 | 13号横穴墓主室道8層 | 漆巻器：壺 | ①(15.4) ②(6.4) ③(4.05) ④(12.1) ⑤(26.9) | やや粗い：～2.5mmの大の長石を少量、3～4mmの大の長石若干含む | 淡灰褐色～ 暗灰黒色 | 暗灰黒色～ 暗黒褐色 | 普通 |
| 第22回78 | 13-1号墓 漆巻器 | 漆巻器：壺 (口縁部) | ②(6.1) | やや粗い：長石の細粒を多く、～2mmの大の石英を少量含む | 黒灰色 | 黒灰色 | 良 |
| 第22回79 | 13号横穴墓主室 道10層 玄門5～6、7層 下部 | 漆巻器：壺 | ②(12.2) | やや粗い：～1.5mmの大の長石を少量、～1.5mmの大の石英を若干含む | 暗青灰色 | 淡灰色 | ややあまい |
| 第22回80 | 13号横穴墓主室道7、10層 | 漆巻器：壺 | ②(11.9) | やや粗い：～2mmの大の長石をやや多く、石英の細粒を若干含む | 暗藍灰色～ 暗灰黒色 | 暗黒褐色 | 良 |
| 第25回85 | 19号横穴墓 | 漆巻器： 無蓋壺(受付部 ～上部) | ②(8.1) | 粗い：～2mmの大の長石を非常に多く、～2mmの大の石英を若干含む | 暗灰褐色～ 栗褐色 | 栗褐色 | 良 |
| 第25回86 | 19号横穴墓 | 漆巻器：壺 (口縁部) | ②(3.4) (3.1) | 良：～1.5mmの大の長石・石英を若干含む | 暗青灰色 | 暗青灰色 | 良 |
| 第25回87 | 19号横穴墓 | 漆巻器：壺 (口縁部) | ②(4.6) (3.4) | やや粗い：～1mmの大の長石を多く、～1.5mmの大の石英を若干含む | 青灰褐色～ 墨綠灰色 | 青灰褐色 | 良 |
| 第25回88 | 19号横穴墓 | 漆巻器：壺 (口縁部) | ②(3.5) (2.8) | 良：～1mmの大の長石を少々、～1mmの大の石英を若干含む | 青灰褐色～ 暗褐色 | 暗褐色 | 良 |
| 第25回89 | 19号横穴墓 | 漆巻器：壺 | ②(2.6) (5.1) | やや粗い：～2mmの大の長石をやや多く、～1.5mmの大の石英を若干含む | 暗茶褐色 | 暗茶褐色 | ややあまい |
| 第25回90 | 19号横穴墓 | 漆巻器：壺 (腰部) | ②(8.3) ⑤(29.7) | やや粗い：～1.5mmの大の長石をやや多く、～2mmの大の石英を若干含む | 暗栗褐色～ 暗褐色 | 暗褐色 | 良 |
| 第25回91 | 19号横穴墓 | 漆巻器：壺 | ②(2.4) | やや粗い：～4mmの大の長石をやや多く含む | 栗褐色 | 暗栗褐色 | 良 |
| 第25回92 | 19号横穴墓 | 漆巻器：壺 | ②(5.9) | やや粗い：～2mmの大の長石をやや多く、石英の細粒を若干含む | 暗栗褐色 | 暗栗褐色 | 良 |
| 第25回93 | 19号横穴墓 | 漆巻器：壺 | ②(7.3) | やや粗い：～1mmの大の長石を多く、～4.8mmの大の石英を少量含む | 暗栗褐色～ 青灰色 | 暗栗褐色～ 灰褐色 | 良 |
| 第25回94 | 19号横穴墓 | 漆巻器：壺 (直井付近) | ②(12.0) | やや粗い：～3.5mmの大の長石をやや多く、石英の細粒を若干含む | 暗栗褐色～ 栗褐色 | 暗栗褐色～ 暗褐色 | 良 |
| 第25回95 | 19号横穴墓 | 漆巻器：壺 | ②(9.6) | 粗い：～2mmの大の長石を多く、～2mmの大の石英を少量含む | 暗灰黒色 | 暗灰黒色 | 良 |
| 第25回96 | 20号横穴墓 | 漆巻器：壺 (腰部～脚部) | ②(3.9) | 良：～1mmの大の長石を少量、～1.8mmの大の石英を若干含む | 淡青灰色 | 暗栗褐色～ 淡黃褐色 | 良 |
| 第25回97 | 24号横穴墓 | 赤漆器：壺 | ②(5.1) | 良：～2.5mmの大の長石を少々、～1mmの大の石英を若干含む | 暗赤褐色 | 暗赤褐色 | 良 |
| 第25回98 | 21号横穴墓 | 漆巻器：坪蓋 (天井部～口縁部) | ②(16.1) ③(3.7) | 粗い：～2mmの大の長石を多く、～2mmの大の石英を若干含む | 暗青灰色～ 暗褐色 | 暗褐色 | 良 |
| 第25回99 | 21号横穴墓 | 漆巻器：坪蓋 (口縁～脚部) | ②(16.4) ③(3.0) | やや粗い：～2mmの大の長石をやや多く、～3mmの大の石英を若干含む | 暗灰黒色 | 栗褐色 | 良 |
| 第25回100 | 21号横穴墓 | 漆巻器： 無蓋壺(脚部) | ②(6.0) (2.0) (4.0) | やや粗い：～1mmの大の長石を多く、石英の細粒を若干含む | 暗栗褐色～ 灰褐色 | 暗栗褐色～ 灰褐色 | 良 |
| 第25回101 | 21号横穴墓 | 漆巻器：壺 (口縁部) | ②(3.3) | やや粗い：～4.5mmの大の長石を少々、～2mmの大の石英を若干含む | 暗青灰色 | 暗青灰色 | 良 |
| 第25回102 | 21号横穴墓 | 瓦器：壺 (直井～脚部) | ②(2.4) (4.6) (6.0) | 精良：長石の細粒を少々、石英の細粒を若干含む | 暗青白色 | 暗青白色 | 良 |
| 第25回103 | 21号横穴墓 | 陶磁器：壺 | ②(2.8) (6.1) (4.3) ⑨(0.9) | 精良：長石の細粒を若干含む | 暗灰褐色～ 栗褐色 | 栗褐色 | 良 |
| 第25回104 | 25号横穴墓 | 漆巻器： 無蓋壺(脚部) | ②(9.0) (3.7) | やや粗い：～1.8mmの大の長石をやや多く、～1mmの大の石英を若干含む | 暗茶褐色～ 深茶褐色 | 深茶褐色 | ややあまい |
| 第25回105 | 25号横穴墓 | 漆巻器：平底 (脚部) | ②(5.7) (5.4) (4.8) | 良：～1mmの大の長石を若干含む | 暗青灰色 | 暗栗褐色～ 栗褐色 | 良 |
| 第28回106 | 21号横穴墓 | 漆巻器：壺 (口縁部) | ②(7.85) | やや粗い：～1mmの大の長石を多く含む | 暗褐色～ 暗灰褐色 | 暗栗褐色 | 良 |
| 第28回107 | 21号横穴墓 | 漆巻器：壺 (腰部) | ②(6.8) | 粗い：～1mmの大の長石を多く、～1mmの大の石英を少量含む | 暗灰褐色 | 暗灰褐色 | 良 |
| 第28回108 | 21号横穴墓 | 漆巻器：壺 (脚部) | ②(3.9) ⑤(17.2) | やや粗い：～1mmの大の長石をやや多く、～1mmの大の石英を若干含む | 暗灰褐色～ 栗褐色 | 暗灰褐色～ 栗褐色 | 良 |
| 第28回109 | 21号横穴墓 | 漆巻器：壺 (腰部～脚部) | ②(7.2) | やや粗い：～1mmの大の長石を多く、～1mmの大の石英を少量含む | 暗青灰色 | 栗褐色 | 良 |
| 第28回110 | 21号横穴墓 | 漆巻器：壺 | ②(6.8) | 粗い：～2.8mmの大の長石を多く含む | 暗青灰色 | 暗灰褐色 | 良 |
| 第28回111 | 21号横穴墓 | 漆巻器：壺 | ②(5.9) | やや粗い：～1mmの大の長石をやや多く、～2.7mmの大の石英を若干含む。～4mmの大の暗緑色地を若干含む | 栗褐色～ 暗褐色 | 暗褐色 | 良 |
| 第28回112 | 21号横穴墓 | 漆巻器：壺 | ②(6.5) | 良：～1mmの大の長石の細粒を少々、石英の細粒を若干含む | 暗青灰色 | 暗青灰色 | 良 |
| 第28回113 | 21号横穴墓 | 漆巻器：壺 | ②(7.8) | 良：～1mmの大の長石を少々、～1mmの大の石英を若干含む | 暗青灰色～ 淡灰褐色 | 暗青灰色 | 良 |
| 第28回114 | 21号横穴墓 | 漆巻器：壺 | ②(6.5) | やや粗い：～1.8mmの大の長石を多く、石英の細粒を若干含む | 暗灰黒褐色 | 暗灰黒褐色 | 良 |
| 第28回115 | 21号横穴墓 | 漆巻器：壺 | ②(B.4) | 粗い：～2.7mmの大の長石を多く、石英の細粒を若干含む | 暗褐色 | 暗褐色 | ややあまい |
| 第28回116 | 21号横穴墓 | 漆巻器：壺 | ②(7.8) | 粗い：～3mmの大の長石を多く、～1.3mmの大の暗栗色地を若干含む | 暗灰褐色 | 暗灰褐色 | ややあまい |
| 第28回117 | 21号横穴墓 | 漆巻器：壺 (脚部) | ②(3.5) | やや粗い：～2.4mmの大の長石をやや多く、石英の細粒を若干含む | 暗灰黒色 | 暗青灰色～ 暗綠色 | 良 |
| 第28回118 | 21号横穴墓 | 漆巻器：壺 | ②(6.6) | 良：～1mmの大の長石をやや多く、～1mmの大の石英を若干含む | 暗灰黒色～ 青灰色 | 栗褐色 | 良 |
| 第28回119 | 21号横穴墓 | 漆巻器：壺か | ②(7.8) | やや粗い：～1.3mmの大の長石をやや多く含む | 暗青灰色 | 暗青灰色 | ややあまい |
| 第28回120 | 21号横穴墓 | 漆巻器：壺 | ②(5.2) | 良：長石の細粒を少々、石英の細粒を若干含む | 暗青灰色 | 暗灰褐色 | 良 |
| 第28回121 | 21号横穴墓 | 漆巻器：壺 | ②(5.9) | 良：長石の細粒を少々、石英の細粒を若干含む | 暗青褐色 | 暗灰褐色 | 良 |
| 第28回122 | 21号横穴墓 | 漆巻器：壺 | ②(8.8) | 良：長石の細粒を若干含む | 淡灰褐色 | 暗灰褐色 | 良 |
| 第28回123 | 21号横穴墓 | 漆巻器：壺か | ②(6.05) | やや粗い：～1mmの大の長石を多く、石英の細粒を若干含む | 暗灰黑色 | 暗茶褐色 | ややあまい |

出土土器観察表④ ①口径、②器高、③口頭高、④底径、⑤頭部径、⑥胴部最大径、⑦受け部径、⑧立ち上がり高さ、⑨高台高、⑩脚部高、⑪体部高

| 辨団番号 | 出土遺構 | 若器(部位) | 各部計測値 | 地土 | 色調 | | 焼成 |
|---------|-------------------|-----------------------|------------------------------------------|--------------------------------------------------------|-----------|------------|-------|
| | | | | | 内面 | 外面 | |
| 第28回124 | 21号横穴墓 | 須恵器: 壺 | ①(11.6) | やや粗い: ~1.8mm大の長石をやや多く、~1mm大の石英を若干含む | 青灰色 | 暗黒褐色~暗灰褐色 | ややあまい |
| 第28回125 | 21号横穴墓 | 須恵器: 壺 | ②(13.3) | 良: ~2.9mm大の長石を若干、~1mm大の石英を若干含む | 淡青灰色 | 暗青灰色~暗灰褐色 | 良 |
| 第33回126 | 25号横穴墓 (口銘部) | 須恵器: 壺 | ①(32.9) ②(10.3) | やや粗い: ~4.5mm大の長石をやや多く、~1.5mm大の石英を若干含む | 淡灰黄色~深灰褐色 | 暗灰褐色~暗灰褐色 | ややあまい |
| 第33回127 | 25号横穴墓 | 須恵器: 壺 | ②(4.1) | 良: ~1.7mm大の長石・石英を若干含む | 淡青灰褐色 | 暗青灰褐色~暗灰褐色 | 良 |
| 第33回128 | 25号横穴墓 | 須恵器: 壺 | ②(5.1) | 良: 長石の繊維を少量、石英の繊維を若干含む | 暗灰褐色 | 暗青灰褐色~暗灰褐色 | 良 |
| 第33回129 | 25号横穴墓 | 須恵器: 壺 | ②(3.6) | やや粗い: ~3.8mm大の長石を少量、~1.5mm大の石英を若干含む | 淡灰褐色 | 淡青灰褐色~暗灰褐色 | ややあまい |
| 第33回130 | 25号横穴墓 | 須恵器: 壺 | ②(6.6) | 良: ~1mm大の長石を若干、~1.3mm大の石英を若干含む | 淡黄灰色 | 淡青灰褐色 | 良 |
| 第33回131 | 25号横穴墓 | 須恵器: 壺 | ②(9.9) | やや粗い: ~2mm大の長石を多く、~2mm大の石英を若干含む | 暗灰褐色 | 暗灰褐色 | ややあまい |
| 第33回132 | 25号横穴墓 | 須恵器: 壺 | ②(5.0) | 粗い: ~1mm大の長石を非常に多く、~1mm大の石英を若干含む | 暗青灰色 | 黑灰色 | 良 |
| 第33回133 | 25号横穴墓 | 須恵器: 壺 | ②(5.75) | やや粗い: ~1.5mm大の長石をやや多く、~1mm大の石英を若干含む | 暗青灰色 | 淡青灰褐色 | 良 |
| 第33回134 | 25号横穴墓 | 須恵器: 壺 (銀巻基部~腹身) | ②(6.8) | やや粗い: ~2.7mm大の長石をやや多く、石英の繊維を若干含む | 青灰褐色~暗灰褐色 | 黑褐色~暗灰褐色 | 良 |
| 第33回135 | 25号横穴墓 | 須恵器: 腹身 | ①(11.5) ②(1.95) ③(13.2) ④(0.75) | 良: ~1.2mm大の長石を若干、石英の繊維を若干含む | 反青褐色 | 灰黄褐色 | 良 |
| 第33回136 | 25号横穴墓 | 青白磁: 瓢 | ②(2.7) | 稍良 | 淡緑白色 | 淡緑白色 | 良 |
| 第33回137 | 28号横穴墓 (平面部) | 須恵器: 小型壺 (頸部~肩部) | ②(3.0) | 粗い: ~1.8mm大の長石を多く、~2.5mm大の石英を若干含む | 暗灰褐色 | 黑灰色 | 良 |
| 第33回138 | 28号横穴墓 (平面部) | 須恵器: 香ヶ平瓶(肩部) | ②(3.5) | 粗い: ~2.8mm大の長石を多く、~0.8mm大の石英を若干含む | 青灰色 | 暗青灰色 | 良 |
| 第33回139 | 29号横穴墓 | 須恵器: 壺 (底部付近) | ②(1.5) | 良: ~1mm大の長石を若干、~1.6mm大の石英を若干含む | 淡灰褐色 | 暗灰褐色 | 良 |
| 第33回140 | 31号横穴墓 | 須恵器: 壺 | ②(6.85) | 良: ~1mm大の長石を若干、石英の繊維を若干含む | 淡灰褐色 | 淡青灰褐色 | 良 |
| 第33回141 | 31号横穴墓 | 須恵器: 壺 | ②(8.0) | 良: ~1mm大の長石を少量含む | 暗青灰色 | 暗灰褐色~暗青灰褐色 | 良 |
| 第33回142 | 31号横穴墓 | 須恵器: 壺 | ②(6.6) | やや粗い: ~2mm大の長石を少量、~2.8mm大の石英を少量含む | 暗灰褐色 | 暗灰褐色 | 良 |
| 第39回143 | 過去調査時出土 (鉢部) | 須恵器: 壺 | ②(5.7) | やや粗い: ~2.9mm大の長石を少量、~2.5mm大の石英をやや多く、~1.5mm大の茶褐色好石を若干含む | 淡黄褐色~淡赤褐色 | 灰黃褐色~淡赤褐色 | 良 |
| 第39回144 | 過去調査時出土 (口縁部) | 須恵器: 壺 | ②(3.15) | やや粗い: 長石の繊維を少量、~4mm大の石英を多く含む | 黄褐色 | 淡赤褐色 | 良 |
| 第39回145 | 過去調査時出土 | 須恵器: 腹身 | ①(1.9)×②(3.8) | やや粗い: ~2mm大の長石をやや多く、~1.2mm大の石英を若干含む | 暗褐灰色 | 青灰色~暗褐色 | ややあまい |
| 第39回146 | 過去調査時出土 | 須恵器: 腹身 | ①(1.1)×②(3.65) ③(0.2)×④(0.95) | 良: ~1.2mm大の長石をやや多く、~1mm大の石英を少量含む | 暗褐灰色 | 暗褐灰色~暗褐色 | ややあまい |
| 第39回147 | 過去調査時出土 (底盤) | 須恵器: 台付壺 | ②(2.9)×③(4.6) ④(0.9) | 良: ~1.2mm大の長石を少量、~0.8mm大の石英を若干含む | 暗灰褐色~灰褐色 | 暗褐褐色~灰褐色 | 良 |
| 第39回148 | 過去調査時出土 | 須恵器: 腹身 | ①(1.3)×②(2.8) ③(1.2) | やや粗い: ~3.4mm大の長石を少量、~4mm大の石英を多く含む | 赤褐色 | 赤褐色~暗紅褐色 | 良 |
| 第39回149 | 過去調査時出土 | 赤褐色須恵器: 高台付身 | ②(1.9)×③(4.75) ④(0.9) | 良: ~1.6mm大の長石を若干、~1.3mm大の石英を若干、~1mm大の金雲母片を若干含む | 淡赤褐色 | 淡赤褐色 | 良 |
| 第39回150 | 過去調査時出土 | 須恵器: 腹身 | ②(1.1)×③(3.0) | やや粗い: ~2mm大の長石をやや多く含む | 暗紫灰色 | 暗紫灰色 | 良 |
| 第39回151 | 11~20号横穴墓 付近黄土 | 須恵器: 腹蓋 | ①(1.0)×②(3.4) ③(4.6)×④(3.1) ⑤(9.3) | やや粗い: ~1.5mm大の長石をやや多く含む、石英の繊維を少量含む | 青灰色 | 黑褐色~暗紫灰色 | 良 |
| 第39回152 | 過去調査時出土 | 須恵器: 小型短縦 壺(口縁~肩部) | ③(0.6)×④(4.6) ⑤(9.3) | 良: ~1mm大の長石を若干含む | 黑灰色 | 黑褐色~黑灰色 | 良 |
| 第39回153 | 過去調査時出土 | 須恵器: 長颈壺 | ②(11.4) ③(10.9) ④(9.3) ⑤(16.9) | 粗い: ~3mm大の長石を多く含む | 暗茶褐色~暗灰褐色 | 暗褐色~暗灰褐色 | 良 |
| 第39回154 | 過去調査時出土 | 須恵器: 壺 (口縁部) | ②(16.6) ③(6.6)×④(5.7) ⑤(15.0) | 粗い: ~2.5mm大の長石を多く、~1.5mm大の石英を若干含む | 淡灰褐色~暗褐色 | 淡灰褐色 | 良 |
| 第39回155 | 過去調査時出土 | 須恵器: 壺 (口縁部) | ②(20.4) ③(6.8)×④(4.45) ⑤(16.0) | 良: ~1.4mm大の長石を少し含む | 淡緑黄色~深褐色 | 黑褐色~深褐色 | 良 |
| 第40回156 | 過去調査時出土 | 須恵器: 壺 | ②(22.5) ③(6.6)×④(3.7) ⑤(17.3) | やや粗い: ~3mm大の長石をやや多く、~1.5mm大の石英を若干含む | 暗黒褐色~暗青褐色 | 暗青褐色~暗褐色 | 良 |
| | 過去調査時出土 | 須恵器: 壺 (鉢・底盤) | ②(29.8) ③(37.6) | 良: ~1.5mm大の長石を若干含む | 淡黄褐色 | 暗青褐色~暗褐色 | 良 |

図 版



鬼津横穴墓群と鳥見山古墳・横穴墓群（空中写真）



調査前の1・23号横穴墓（東から）

図版 2



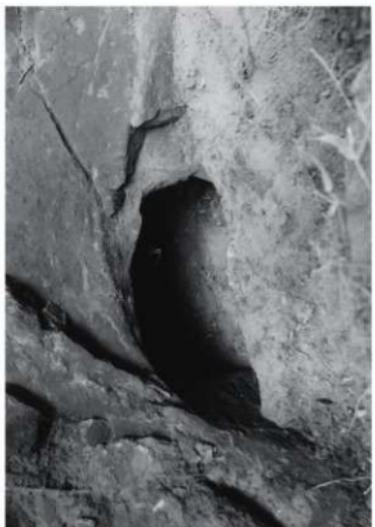
1号横穴墓玄室内（東から）



2号横穴墓（北東から）



調査前の4号横穴墓（東から）



4-1号墓検出状況（東から）



4-2号墓検出状況（東から）

図版4

7号墓漢道入口（南から）



5号横穴墓（南から）



6・7号横穴墓（南から）





8 - 2号墓室内（西から）

8号墓墓道出土土器（西から）



8号墓調査前（西から）

8・30号墓検出状況（北西から）



図版 6

10号横穴墓出土状況（南から）



6号横穴墓（南から）



平成 15 年度調査時の丘陵東側横穴墓群（右端が 13 号横穴墓、南東から）



13号横穴墓主墓道東西壁土層（南東から）



13号横穴墓主墓道南北土層（西から）

図版 8



13-2号墓検出状況（写真左側は15-2号墓、東から）



13-1号墓瓦門の閉塞状況（南西から）

13-1号墓玄室内土器出土状況（北から）



同上玄室内屍床と鉄刀の出土状況（南から）



19号墓検出状況（南東から）



図版 10



21号墓検出状況（南東から）



20号墓検出状況（南東から）



22号墓検出状況（南東から）



調査前の23号墓（南東から）



23号墓玄室内（南東から）



同上漢道部に残る鑿状工具痕（南西から）



27号墓検出状況 (西から)



25号墓検出状況 (南から)



29号墓 (調査前, 西側)



28号墓 (調査前, 西側)

29 号墓検出状況（南西から）



29-1号墓閉塞石（南西から）



29-1号墓墓室内（南西から）



31-2号墓（南東から）



図版 14



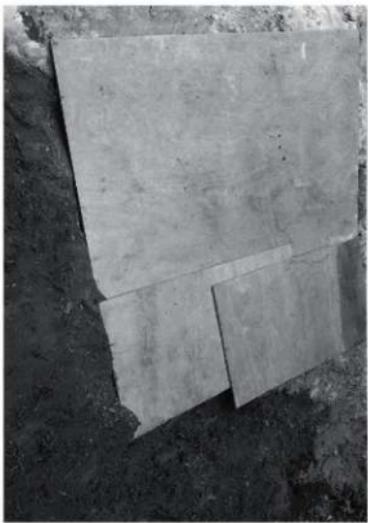
13号墓埋め戻し状況①



1 . 23号墓埋め戻し状況



13号墓埋め戻し状況(南東から)



13号墓埋め戻し状況②



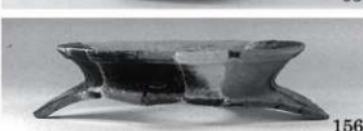
図版 16



64



65



156



84



145



146

156



出土遺物②

報告書抄録

| | | | | | | | | |
|----------------------|---------------------------------------------------------------------------------------|-------|-------|-------------------|--------------------|---------------------------|-------------------|---------------------|
| ふりがな | おにづよこあなぼぐん II | | | | | | | |
| 書名 | 鬼津横穴墓群 II | | | | | | | |
| 副書名 | | | | | | | | |
| シリーズ名 | 遠賀町文化財調査報告書 | | | | | | | |
| シリーズ番号 | 第20集 | | | | | | | |
| 編著者名 | 平野 隆之 | | | | | | | |
| 編集機関 | 遠賀町教育委員会 | | | | | | | |
| 所在地 | 〒811-4392 福岡県遠賀郡遠賀町大字今古賀 513 | | | | | | | |
| 発行年月日 | 西暦 2013年 3月 31日 | | | | | | | |
| ふりがな 所収遺跡名 | ふりがな 所在地 | コード | | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
| おにづよこあなぼぐん 鬼津横穴墓群 | ふりがな 所在地 福岡県遠賀郡 おんがとうきょうおおきやま 遠賀町大字鬼津 | 40384 | 37016 | 33° 52' 04" | 130° 39' 57" | 20111205 ~ 20120315 | 760m ² | 自然崩壊本調査 町内遺跡分布調査 |
| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | | | 特記事項 | |
| 鬼津横穴墓 | 横穴 | 古墳時代 | 横穴墓 | 須恵器、土師器、 鉄器、鉄滓 | | | | |
| 要約 | 1・13号横穴墓の自然崩壊本調査と遺跡詳細分布調査に伴い横穴墓の分布範囲を確認した結果、舌状丘陵の南側斜面と東側斜面の2ヶ所に計30基以上の横穴墓が所在する事が判明した。 | | | | | | | |

鬼津横穴墓群 II

遠賀町文化財調査報告書第20集

平成25年3月31日

編集 遠賀町教育委員会

福岡県遠賀郡遠賀町大字今古賀 513番地

発行 有限会社 青雲印刷

福岡県北九州市小倉北区清水1丁目8-7